

歴史物語の生成と発展 —高家将物語を中心に

历史故事的生成与发展—以高家将物语为中心

大塚 秀 高*

OTSUKA, Hidetaka

中国では文学革命以前に白話で書かれた小説を通俗小説とよんでいる。文学革命とは胡適が1918年に提唱し、魯迅の『狂人日記』で口火がきられた、それまで文語で書かれていた小説を口語で書くという言文一致運動であった（なお、この時期の前後における小説の概念の相違についてはここでは論じない）。だが、これ以前に口語（白話）で書かれた小説が存在していなかったわけではない。それが通俗小説であった。とはいえ通俗小説で使われた白話は胡適らが思い描いていた口語と異なるものと意識されていた。白話で書かれた戯曲・小説の研究者であった馬廉が、自身蒐集したそうした類の作品を著録した目録を「不登大雅文庫劇曲小説目」と命名し、白話小説すべてのカタログ化を目指した孫楷第がその成果に『中国通俗小説書目』と命名したように、白話は大雅の堂に登らぬ通俗小説などで用いられる古い口語と認識され、新思想・新文学を盛り込むに相応しい口語とはみなされていなかったのである。

白話で書かれた通俗小説の内容は多岐にわたるが、長篇のもの多くは、宋代の盛り場の演芸の「講史」に淵源する、史実とフィクションが緋い交ぜに語られる歴史物語にもとづく歴史小説であった。明の嘉靖以降に出版された歴史小説は、その書名の多くに演義や志伝の文字を含んでいた。

それを清の乾隆以降に刊行された作品と区別して演義小説とよぶとき、演義小説は出版の際にその歴史物語に由来する荒唐無稽なエピソードを削ぎ落とす傾向を強くもっていた（もちろんその程度は作品によって異なる）。だが、乾隆以降になると、印刷文化と読者層の拡大につれ、歴史物語のかつてなら削除されたはずのエピソードや、その後生まれ、当時巷で盛んに語られていたサブ・ストーリーまでが掻き集められ、そのまま、あるいは多少手を加えただけで文字化され出版されるようになった。そうした作品は演義小説同様歴史物語にもとづく歴史小説ではあったが、演義や志伝を銘打たず、史実にこだわらないことを闡明するためか、全伝を標榜したりした。本論ではそうした作品を演義小説と区別し、物語小説¹とよぶことにしている。物語小説の代表には説唐シリーズ（全伝、後伝、三伝）や『説岳全伝』などが挙げられる。

物語小説は演義小説に比し歴史物語に近いものであって、口演の名残ともみなせる語り口を多く留め、演者（説話的）らしき人物を語り手として登場させたりしていたが、三言二拍に代表される、いわゆる話本小説と同様、実際に語られていた物語とは少なからざる相違があったはずである。そもそも演義小説といい物語小説といっても歴史物語にもとづく歴史小説であることに変わりはなく、史実との間合いの取り方と手間のかけ方が異なっ

* おおつか・ひでたか
埼玉大学 名誉教授

ているにすぎなかった。そこで、本論においては、演義小説と物語小説を包括して述べたい場合には歴史小説²の名称をもちいることにした。

かつて演義小説となった歴史物語が後に物語小説となったように、歴史物語のなかには複数回文字化されるものも存在した。ただし、清代中期以降ともなると、それに小説の衣を纏わせる手間を省き、韻文に散文を交えた歴史語りの口調のままに文字化され出版されるものも現われたし、白話による小説創作の機運が熟した清末には、巷に溢れる歴史物語に刺激されてか、その口調に倣った文体による創作もなされるようになった³。そうした作品のなかには今日弾詞、鼓詞、木魚書などに分類されるものがある⁴が、その成立に関わった者の意識においてはそれも小説の範疇に属するものであった⁵。よって、本論では先の物語小説にこの類の作品も含めて論ずることにしたい。

話が先走ってしまった。話題を物語小説に戻そう。物語小説の代表のひとつがいわゆる家将小説である。家将小説とは、楊、狄、呼、岳、薛、羅などの一族数代に互る武将の活躍とその悲運を語り、これを鎮魂する役割をも担っていたと思われる小説群である（小説は戯曲同様、本来鎮魂の役割を担っていたと思しい）。家将小説については專著もあるが、その書名通り、これまでは小説を中心に研究されてきた。しかし、筆者がかつて「これらの作品群（家将小説）を論ずる際は通俗小説のみならず、主人公を同じくし、ストーリーの大半もしくは一部を同じくする芸能や演劇に属する作品をも含めて論ずることが肝要である」と述べたごとく⁷、多様なジャンルの作品として文字化され出版されてきた。歴史物語が後世に残される道は小説形式しかなかったわけではなかった。芸能や演劇に基づく作品として残されてもおかしくないし、むしろそれが自然だったはずである。よって本論では以後家将小説にかえて家将物語により、

一族数代に互る武将の活躍とその悲運を語り、これを鎮魂する役割をも担っていたと思われる、歴史物語にもとづくすべてのジャンルの作品をさすことにしたい（ちなみに本論で論ずるのは主に高家将物語である）。

なお、家将物語のうち、清代の乾隆年間以降に刊刻された物語小説は、上田望により英雄伝奇小説と命名された⁸作品と重なる。上田は、英雄伝奇小説を祭祀性演唱芸能が分化した詩讚体祭祀演劇と詩讚体祭祀祭唱のうち後者が出版化されたものとし、前者は興行化され詩讚体市場地演劇となったとしたうえで、「詩讚体祭祀演劇の英雄物語は、清代中期の村落の市場化に伴う地方劇の勃興に遭い、今度は梆子戲や皮黃戲などの詩讚体市場地演劇、或は宝卷、鼓詞、彈詞などの詩讚体説唱の伝播ルートに乗って急速に中国全土に広まってゆく。そしてそれを契機に小説の方でも乾隆年間、空前絶後の英雄伝奇小説の出版ラッシュが始ま」と述べ、演劇が小説に先行しその契機となったとの見解を披露している。

問題はその契機であるが、上田は「大きな影響を与えたのが、元明詞話の流れを汲む地戲、関索戲などの古い村落系祭祀演劇」であって、「その演目が同じ詩讚体の梆子戲にも吸収され、全国に普及し」、「同時にその英雄物語の流行が当時の出版界を刺激し」「英雄物語を小説化し売りだそうという機運を生んだのであろう」とする。乾隆年間が叙上の混沌とした時代であることは確かだが、筆者が物語小説と認める、宋の太祖趙匡胤を主人公とする英雄物語であり、なおかつ本論で論ずる高家将物語の重要な構成作品である『趙太祖三下南唐被囚壽州城』の出版物としてのレベルの低さ⁹や、『説呼全伝』のストーリーのお粗末さ¹⁰にみる限り、筆者は出版業が盛んになり「刻書業界や、それを消費する読者層が回復してきたため」「多量の英雄伝奇型の歴史小説が陸続と生まれてきたのであ

る」の一言では片づけられないものを感じる（ちなみに『趙太祖三下南唐被困壽州城』を上田は英雄伝奇小説に含めていない）。加えて、上田がこの論文を発表した 1994 年には多量の家将物語を今に伝える清朝宮廷連台戯などが影印出版されていなかった¹¹。英雄物語の流行ならびに小説化と清朝宮廷演劇の関係については新たな観点から検討される必要があるであろう。

さらに、上田の「英雄物語の伝播」の図式によれば、宋・元代に村落に存在した祭祀性演唱芸能が明代に詩讚体祭祀祭唱（演劇）となり、清代に出版化（興行化）されることになるというのだが、英雄物語自体は、筆者が氏岡真士を引いて後述するように、夙に『五代史平話』や『殘唐五代史演義伝』の一部、否、中核として夙に文字化され出版されていた。しからば明代にあって村落に留まっていた英雄物語のその後の状況については上田の述べる通りであったかも知れないが、当時すでに市場地では英雄物語を含む小説（演義小説）が出版されていたし、宋末元初にあって同様の作品（平話）は出版されていたことになる。この事実を鑑み、筆者としては上田説にひとまず以下の修正を加えることを提案したい。すなわち村落の芸能として演ぜられていた物語が小説や演劇として出版・興行化される機会はただの一度きりではなかった。もちろんそれが文字化され出版されるにあたっては（以後、筆者の専門でない演劇の興行化については述べない）、当時の小説の概念に規制されざるをえなかった、と。言い換えれば、文字化されるようになって以後もそれ以前同様、語られる英雄物語の主人公は次々と替わったし、文字化され出版される際にこれを規制した小説の概念、すなわち小説の範疇も平話、演義小説、物語小説と変遷した、となろう。酒も革袋もともに替わったのである。

ひるがえって家将物語であるが、そのうちの楊

家将物語には『北宋志伝』や『楊家府世代忠勇通俗演義志伝』が、薛家将物語には『永樂大典』所収の『薛仁貴征遼事略』や成化説唱詞話の『唐薛仁貴跨海征遼故事』が、岳家将物語には『大宋中興通俗演義』が、それらを語る物語小説以前に存在していた。狄家将物語にも『新編醉翁談録』の「小説開闢」に「収西夏説狄青大略」とあることから、先行する物語が存在し市場地で語られていたことが窺われる。だが、呼家将物語や羅家将物語にはそうした痕跡がみあたらない。よってこのふたつの家将物語については、清朝の乾隆年間以降に、既存の楊家将物語や薛家将物語に関連して新たに紡ぎ出された、この両者のサブ・ストーリー的な家将物語であった可能性が考えられよう。同じく家将物語といっても生成時期・過程は同じではなかったのである。

では本論で扱う高家将物語はどうだったのか。その点を論ずるにあたっては、まずもって高家将とはどういう一族だったかを史実により闡明しておく必要がある。

一 高家将初代の高行周

——英雄物語から家将物語へ

高家将物語に登場する高家の諸将のうち、史書に伝が立てられているのは高行周（～952）とその子懐徳の二人のみである（ほかに高家将物語に言及のない懐徳の二子、處恭、處俊がいる）。したがって、高家将物語に登場するこの二人の子孫や配偶者はすべて架空または血縁のない人物ということになる。高行周には『旧五代史』巻 123（周書 14）・列伝 3 ならびに『新五代史』巻 48・雜伝 36 に、高懐徳には『宋史』巻 250・列伝 9 に伝が立てられている。それらによれば、高行周は字を尚質、曾祖を順厲（『新五代史』には言及がない）、父を思継といった。高行周の籍貫を『旧五代史』は幽州、『新五代史』は媯州とし、懐徳の籍貫を『宋史』

は真定常山とする。しからば高行周は五代の乱世に発跡変泰した武将のひとりであって、出自の明らかな名家の出ではなかったに相違ない。後世の高家将物語は、行周の曾祖を高譚勝、祖父を高文舉、父を高思繼とし、譚勝は「兩榜進士」、文舉は「唐僖宗駕前拜宰相」、思繼は「延安帥」にして「白馬銀槍」と謳われた武将¹²であって王彦章に殺されたとする¹³。もちろんすべて架空の人物であり経歴である。ちなみに本論は高家将物語に見える高家の諸将につき論ずるものであって、史書に見えるそれを論ずるものではないから、史上の高行周については五代の後漢(947-950)から後周(951-960)にかけての時期に一定の役割を果たした武将といっておけば十分であろう。

明代以前に刊行された五代から宋初の時代を扱った歴史小説としては『五代史平話』『残唐五代史演義伝』ならびに『南北両宋志伝』が現存する。このうち高行周が登場するのは『南北両宋志伝』の『南宋志伝』のみである。

『五代史平話』は宋末元初に刊行されたもので、「新編五代梁(唐、晋、漢、周)史平話」を銘打つそれぞれ上下二巻全十巻からなるが、惜しくも梁史、漢史の下巻を欠いている。漢史の下巻を欠くため確言はできないが、『五代史平話』に高行周は登場していない。『五代史平話』の性格につき、氏岡真士は「四分の三は史書に基づくが、残る四分の一は明らかな虚構」とし、その虚構部分につき「黄巢・朱全忠・石敬瑭・劉知遠・郭威といった未来の皇帝たちが(黄巢は自称に終わったが)、不幸な生い立ちから成り上がってゆく過程の描写」からなると述べる¹⁴。そうした部分は巷間に流布する英雄物語からなるとみてよかろう。

『残唐五代史演義伝』は羅貫中編とされる8巻60則からなる演義小説で、回でなく則からなることに鑑み、羅貫中の手になるか否かは別として、比較的成立の古い、英雄物語(李存孝物語)の様

態を留めた作品であるとみなしてよかろう¹⁵。ただし、後漢ならびに後周を扱う部分はあわせて三則(第58-60則)に過ぎず、高行周への言及はない。

『南宋志伝』は熊大木の編になる『南北両宋志伝』の南宋部分50回¹⁶のことで、嘉靖年間に成立した演義小説である。原刊本は現存しないが、複数のほぼ同一内容の万暦刊本が現存する。氏岡によれば、その主な来源は『五代史平話』であるという¹⁷。以下に氏岡の説くところ引こう。

氏岡は「『南宋志伝』の三分の二は、『五代史平話』に基づくと考えて良かろう」としたうえで、これと関係ない部分では「第十二回から第二十三回までと第二十八回以降に描かれる趙匡胤の出世話が目立つ」とし、イデマの「『飛龍全伝』は『南宋志伝』の増訂本ではなく、『南宋志伝』が利用した趙匡胤の平話に基づくであろう」との説を紹介したうえで、「『飛龍全伝』は『南宋志伝』を種本にしている」との自説を述べる。『飛龍全伝』については後述のこととして、とりあえず氏岡説の結論を引けば、『飛龍全伝』が「『南宋志伝』を直接利用しているのは『飛龍全伝』の四分の一程度であって、残りは間接的な利用に留まるが、それでもその部分が「趙匡胤の平話を用いているとは考えにくく、吳璿が『飛龍全伝』の序で言及し、「刪其繁文、汰其俚句、布以雅馴之格、間以清雋之辞」と述べる「飛龍伝」は古の『趙太祖飛龍記』平話ではなく、『南宋志伝』の異称であろう」となる。

氏岡説とイデマ説の相違は、『飛龍全伝』の『南宋志伝』との文言の相違を、先行作品である『南宋志伝』の改変(間接的な利用)とみるか、名のみ知られずで失したさらなる先行作品である(らしい)『趙太祖飛龍記』に由来するとみるかという、基本的な考え方の相違に根ざしている。

ひるがえって、かつて存在した、物語に根ざした作品の影響を後世の同様な作品に見ようとする

説には、ひとつの、しかし大きな解決しがたい問題点が存在している。字句の相違を根拠に影響を論ずる以上、それが成り立つには、平話、演義小説、物語小説のいずれにもせよ、かつて存在した物語をその当時のスタイルで書き留めた小説（この場合は『趙太祖飛龍記』。戯曲でもよいが、それでは議論にまぎれが生じよう）が存在し、なおかつそれが後世のほぼ同じ内容の作品（『飛龍全伝』）が成立するまで継続して存在していたことが証明されねばならないのだが、それ自体困難であるうえ、この説が提唱される前提に、かつて存在した先行作品（『趙太祖飛龍記』）の現在における佚失がある以上、説の当否を検証することがそもそも不可能であるという点がそれである。この説は『趙太祖飛龍記』が存在しないという前提を踏まえて提起された説であり、仮にそれが発見されたなら、弊履のごとく打ち捨てられる可能性をもつものであった。

とはいえかつて存在し、先行作品（平話や演義小説）のもととなった物語が、先行作品が出版された後も巷間に流布し続けていたのであれば、先行作品のみによってではなく、先行作品とそこで一度は文字化されたかつての物語の子孫によって、場合によってはかつての物語の子孫のみによって後世の作品が成立する可能性もあるのではないかと（物語は書承のみによってではなく、口承によっても伝承されたはずである）。この場合、同一の物語ではあっても、異なる時期に存在していたそれがまったく同内容であるとは考え難く、むしろ物語の性格からして、それが時をへてなお変化しなかったと考えることの方が不自然ではあるまいか。このことは『三国志平話』と『三国志演義』の関係を念頭におけばすぐに理解されるはずである。物語がその変化の足取をとめることはその死を意味する。それゆえ一度は固定化を受け入れたかみえた物語も、時をへて新たな物語を紡ぎだ

すことがあった。たとえば『三国志玉璽伝』がその好例である。

物語がある時点で文字化され、それが現在まで残されるか否かは多分に偶然に左右されたはずである。ましてや出版となればいうまでもない。だから出版されたのに現存していない物語以上に、出版されることなく佚失した物語が多数存在したはずである¹⁸。

筆者が以下で論じようとしている高家将物語は、楊家将物語のごとく専らそれを扱う演義小説こそ存在しないが、部分的にそれを扱う作品なら複数存在している。しかも時代を逐ってそれが生成・発展していった経緯がみてとれ、家将物語、ひいては歴史物語を扱う際のモデルたりうる。これこそ筆者が本論で高家将物語を取り上げたゆえんなのである。

最後に英雄物語が文字化され出版されたものと上田がいう「英雄伝奇型の歴史小説」と筆者のいう物語小説の形をとる家将物語の関係につき一言述べておきたい。筆者は物語小説にはふたつのタイプがあると考えている。未来の皇帝を主人公とするものと、そうした英雄に寄り添い、その天下取りを援け、結句悲惨な最期を遂げる武將を主人公にするものがそれである。後者の武將をも英雄というなら、両者に相違はなくなる。だが、筆者は両者には本質的な相違があると考えている。『五代史平話』や『残唐五代史演義伝』はひととき時めく英雄の物語であったが、『南宋志伝』は宋王朝を開いた太祖趙匡胤の英雄物語をメインとしており、『北宋志伝』は英雄とは言い難いとはいえその後を継いだ太宗が天下を統一する経緯を語るものであった。よって『南宋志伝』の高家の諸將にせよ、『北宋志伝』の楊家の諸將にせよ、天下取りの英雄にはなれず、せいぜい悲運の武將になるしか道がなかったのである。とはいえ太宗はとうてい王朝創業者の器ではなかったし、そもそも

その英雄物語など存在していなかったから、引き立て役の楊家の諸将が目立つ結果になったのである。しからば一時にもせよ皇帝になれない英雄を主人公とし、かわりにその血脈を後世に繋ぐことを許された物語小説こそが家将小説であるということになる。

二 二代目の兄弟・高懷徳と高懷亮

——絡み合う家将物語

『南宋志伝』にもどろう。高行周は『南宋志伝』の第23回に高辛周として初出する(後述する『宋史奇書』では高興周とされる。以下本論では引用を除き高行周と表記する)。智勇双全で「使一柄大捍刀、上陣如飛、敵人不敢近」のため高鷄子とよばれたとされる。だが本伝にそうした記載はなく、その命名の由来が『南宋志伝』の通りだったかはもちろん、渾名そのものの存否もさだかではない。ちなみに『南宋志伝』の第23回には、漢主に反意を疑われ進退に窮した郭威が評判の占師費博古に「百個雀兒天上飛、九十九個過山西、内有一個踏破脚、大梁城裏賃驢騎」なる四句の詩を示され、「他卦影上分明写出我姓名、極是靈驗」と決意を固めたとする情節があり(過は郭と同音)、これを迎え撃つべく出撃した高行周も兵士に「若有汴京高鷄子、那怕銅臺郭雀兒」と「口占」させたとある。郭威の幼名が渾名が「雀兒」であって、敵の大將雀兒の郭威より我が軍の大將鷄子の高行周の方が強いとの暗示を兵士にかけたわけである。この「雀兒」と「鷄子」に関わる言説は後の高家將物語においてもたびたび繰り返されているのだが、それらが後付であったとは必ずしも言えまい。

高行周は懷徳、懷亮の二子を率い、都汴梁に攻め寄せせる郭威を迎え撃った。だが敵の陣取る滑州城上空に帝星が輝いているのを見て、戦わずして幽州に退いた(第24回)。その後郭威は天下を取り(後)周の太祖となった。一時は契丹と連携して対

抗することも考えた行周だったが、結局長子懷徳を都の様子を探りにやるにとどめた。だが憂憤の余り病となり、次子懷亮に「汝兒若有好消息來、則汝二人事周主、不然、可投山後応州以取功名」と言い残し敢え無くなる(言訖而卒)。高家將物語と楊家將物語のあざなえる縄のごとき関係はここから始まる。兄からの消息がなかったため、懷亮は父の死後山後応州の楊業をたより、その義子となって楊懷亮を名乗った(第28回)。

ちなみに高懷亮即楊懷亮については高家將物語を楊家將物語に関係づけるために創出された最初の人物であつたらう(後述)。楊業の子の数は『宋史』においては六人であつたものが、元・明の雜劇で『宋史』の楊延昭(延朗)伝に見える同姓の楊嗣を加えた七人となり、後には楊業伝に伝が附される王貴を四郎楊貴に変身させ、これと同時に遼の公主の駙馬となる八郎延順を登場させるなどして八人とした¹⁹結果、架空の人物ではあるがそれまで楊業の女とし広く認知されていた八姐、九妹と矛盾を来すに至るなど、楊家將物語の可変要素のひとつであり続けていたのだが、その点については機を改めて論じたい。

言歸正伝、『南宋志伝』の高行周は次子懷亮に看取られ息を引き取ることになっているのだが、『飛龍全伝』では高行周の死をめぐり、これとまったく異なる、奇怪としかいいようのない物語が展開されていた(後述)。そもそもこの物語、『飛龍全伝』全体の通奏低音をなす、趙匡胤を赤鬚火龍、鄭恩を黒虎星、周の世宗柴榮を黄龍の下凡したものとし、この三人に義兄弟の契りを結ばせるという構想と深く結びつくもので、『三国志演義』の関羽、張飛、劉備を念頭においたものであつたが、関羽にあたる趙匡胤を宋王朝の創業者に相応しく格上げするため、『飛龍全伝』を通じ、これでもかとばかり繰り返される英雄神話のひとつであつた。

英雄神話の最初のは『飛龍全伝』の第1回に見える。趙匡胤の跨った城隍廟の泥馬が動き出すというもので、おそらく『大宋中興通俗演義』第8則に見える、南宋の高宗が泥馬で渡河したとする物語と同根より生じたものであったろう。これにより都を騒がしたとして趙匡胤は大名府に配流される。そこで知り合った妓女の韓素梅がきっかけで韓通と三回に亙るいざごきをおこし、結句韓通は趙匡胤の陳橋の兵変の際に禁軍教頭の王彦昇に殺される(第60回)。私に按ずるに、韓素梅(と素梅の生んだ八大王徳昭)ならびに韓通、鄭恩の三人は、かつて趙匡胤物語におそらく三者同時に導入された人物であったが、いずれも実在の人物ではなかったため、演義小説の『南北両宋志伝』の時点で、三者の関わる物語が大幅に削除ないし修正された結果、後世の趙匡胤物語を扱う物語小説ではその本来の姿があいまいになってしまったようである。

閑話休題、『飛龍全伝』によれば、韓通を百鈴関で痛めつけた趙匡胤と鄭恩は(三打)、韓素梅とともに、後周の太祖郭威の義子となり都に攻め上ったその留守を預かっていた義兄の柴榮を禪州に尋ねる。そこで昔の友人や左輔星の趙普と会同した(龍虎禪州大結義)趙匡胤は、禪州を流れる太清河が氾濫しており、洪水に乗じ城壁に迫る烏龍の左眼を射抜く。かくて洪水は治まったが、この烏龍なんと妻の柴氏の病を知り夢に烏龍となって禪州にやってきた郭威であった(第39回)。郭威は都にやってきた趙匡胤を夢に見たと宮中で捕え処刑しようとする(第42回)。趙匡胤は柴榮の口添えて処刑を免れ、潼関の高行周討伐に向った(第43回)。行周はその福相を見るや城門を鎖して戦おうとせず(第45回)、自身の行く末を知り、郭威あてに懷徳の重用を求める遺書を書き、自刎する(第46回)。郭威は行周の首を見て病となる(このあたり関羽の首を見て病む曹操を念頭にお

いていよう。なお次子の懷亮は幼時に行方不明となっていたとされる)。そののち戯龍楼で氣息奄々となっている烏龍を見た趙匡胤は携えていた神簪棍棒でこれを撃ち、ために郭威は在位三年で死に、柴榮が即位することになった(第47回)。このあたり、京劇では一連の「鶻子觀星」「掛印」「高平関(一名借人頭)」として演ぜられているが、家族を郭威に人質に取られた趙匡胤がやむなく高行周に首を求め、行周が子の懷徳と匡胤の妹美容との縁組を条件に承知するという荒唐無稽な物語となっていた。おそらく家将物語に不可欠な、王朝の創始者と悲劇の武将一家の特殊な結び付きを説明するため、楊家将の場合は楊業(ないし楊褒)の「不殺の恩」が、高家将の場合には「借人頭」という文字通りの血盟が必要とされたのではなかったか。そこで次節ではいささか回り道になるが、楊家将の楊業(ないし楊褒)とその「不殺の恩」につき述べておくことにしたい。

三 千変万化する物語

——家将物語の脇役たち

楊業は『宋史』巻272・列伝31に伝が立てられている。籍貫は并州太原、父は(後)漢の麟州刺使の楊信で、延朗、延浦、延訓、延瓌、延貴、延彬の六子がいた。後に延昭と改名した長子の延朗は、その武勇を恐れた契丹に楊六郎とよばれた。延昭の子が文広で、この二人は楊業に続き伝が立っている。楊家将物語には六郎延昭と文広の間に宗保の世代を設けるが、宗保は架空の人物である。ちなみに当初の楊家将物語にはまったく登場しない楊業の父であるが、後には楊褒(楊瓌)となり、これに関するサブ・ストーリーが大々的に展開された(後述)。

話題を『南宋志伝』に見える高家将物語に戻そう。都で様子をさぐっていた懷徳は、郭威の後を継いだ世宗柴榮が北漢の劉崇攻めの先鋒を募った

のに応じて召し抱えられる（第30回）。天井関で手柄を立てた懷徳は、楊業の義子となっていた高懷亮改め楊懷亮と鉄籠原で見える（第33回）。兄と知らぬ懷亮は楊業の策に従い懷徳を鉄籠原に閉じ込めるが、なぜか心が落ち着かない（心下不寧）。それゆえくだんの周将が兄ではないかと疑い、付き従っていた総官の馮益の勧めに従い、矢文で自身の名を明かす。懷徳も鎗矢を飛ばしてこれに応えた。かくして懷亮は馮益とともに周に降った（第34回）。完全武装して名乗りもせずいきなり闘ったなら、別れてわずか一年の兄でもわからないこともあるから、以上の展開に無理はない（ちなみに『飛龍全伝』の第51回では父行周が懷亮の夢枕に現われ、周将が兄であると知らせるとなっている）。

『南宋志伝』は、趙匡胤が周の後主柴宗訓を退けて自ら即位し、南平、楚、後蜀、南漢、南唐を滅ぼし、残るは呉越と北漢のみという時点で全巻の幕を閉じ、宋による全国統一は『北宋志伝』に持ち越されることになっている。この間、陳橋の兵変で高懷徳が「主上幼弱、我輩出死力破敵、誰人知之。不如先立点檢為天子、然後北征」とクーデターを扇動する²⁰ことになっているが（第44回）、高氏兄弟にこれ以外の目立った活躍はなかった。

『宋史』巻248・列伝7 公主によれば、実在の高懷徳は趙匡胤の妹秦国大長公主（後に燕国大長公主）の嬪になっているし、後世の高家将物語でも趙美容（『飛龍全伝』では趙玉容）の駙馬となっており、単なるアジテーター以上の活躍をしたに相違ない。事実、後述する『趙太祖三下南唐被困壽州城』では妻の美容、子の高瓊、嫁の劉金定とともに一家で主役をはっている。だが『南宋志伝』ではまったく活躍していないのである。

そもそも『南宋志伝』は『趙太祖三下南唐被困壽州城』とは異なり、太祖の「三下南唐」を全面的に描くものではなかった（関連記事は第50回の

み）。しからば『南宋志伝』後半における高懷徳（と懷亮）の物語の欠如については次のふたつの考え方が成り立つであろう。ひとつは『南宋志伝』刊行の時点では高氏兄弟を主人公とする物語がいまだ十分に成熟していなかったというものであり、いまひとつは、それは存在し巷間に流布もしていたが、何らかの理由で『南宋志伝』の後半には取り込まれなかったとするものである。両者のいずれが真実に近いのか。以下ではこの点について考察したいのだが、については楊業の義子となり、兄懷徳と兄弟の名乗りをあげる場面まで設けられている高懷亮のその後に関する考察から始めることにしたい。

ただそれには筆者の拠って立つ観点をあらかじめ闡明しておく必要がある。高家将物語に限らず、異なる時代はもちろんのこと、同一の時代を扱うものであり、なおかつ主人公を同じくする物語（物語小説、演義小説のみならず戯劇とその劇本を含む。以下同様）であっても、それぞれが独自の経緯をたどり生成・発展してきている以上、相互に矛盾が存在しないとは必ずしもいえないというのがそれである。そのうえで、まずは『南宋志伝』に見えない、以下の四つの高懷亮（と高懷徳）の物語をとりあげ、順次検討してゆくことにしたい。

第一に挙げるのは、清朝宮廷連台戯の『欣見太平』に見えるそれである。『欣見太平』は全8本192齣からなると推定されるが、第4、6、7、8の4本のみ現存している²¹。このうち第4本では高氏兄弟の鉄籠原での再会と趙匡胤と楊褒が義兄弟の契りを結ぶ経緯が、第6本では南唐の杜瑤の美人計にかかった世宗柴榮が趙匡胤、鄭恩、高氏兄弟などの近臣を都から遠ざけ、高氏兄弟が東青山で山賊となる次第が、第7本では杜瑤とその娘の文姫にあやうく南唐へ拉致されかけた柴榮があらかじめ苗光義の指示を受けていた高氏兄弟に救出さ

れる経緯が、第8本では南唐軍によって帰徳城に閉じ込められ危機に陥った趙匡胤に代わって妹美容が出陣し、帰徳城に入城した柴榮と高氏兄弟が包囲戦の最中に死んだ兄弟の母を弔ったのち都に帰還する経緯が演じられている²²。ちなみに第4本については『南宋志伝』の第30回から第34回及び『飛龍全伝』の第47回から第51回に相当する。第6本以降は『南宋志伝』の第43回、『飛龍全伝』の第59、60回に見える、「柴榮が梁王を東宮に冊立し賞花楼を建ててが、鄭恩がそれに火を着け、南唐が美人計を企図して送り込んだ秦若蘭、杜文姫を火中に投げ込む。韓通が鄭恩の仕業と奏上するが、柴榮は鄭恩を罰しなかった」とする物語の別バージョンとなっている。第8本は『趙太祖三下南唐被困壽州城』の「被困壽州城」の別バージョンであろう。

残る三つは高懐亮の戦死に関するものであるが、時、所とも異なっている。『南宋志伝』に続く『北宋志伝』第15回に見えるものは、耶律休哥に率いられ朔、雲等の州に侵攻してきた遼軍を迎え撃った高氏兄弟が、懐亮は耶律沙に斬られ、懐徳は自刎するというもので、太宗の雍熙二(985)年二月のこととされる。『飛龍全伝』の第57回に見えるものは、世宗の顯徳3(956)年の「一下南唐」のおり、鳳翔関で劉猛に勝利した高懐亮が徐州の吊り橋で戦死したとするものである²³。最後は『趙太祖三下南唐被困壽州城』第32回に見えるもので、『北宋志伝』に似るが時、所の明記はなく、懐亮に妻子がいたとする点が他と異なる。以下に当該部分を引用しておく(以下『趙太祖三下南唐被困壽州城』からの引用では、気づいた誤字は正し略字は本字に直した)。

原来当初高懐亮未出仕在家、残唐五季之末、亮初来汴京尋父高行周不遇、后行周尽忠死節于潼関、亮不得知、至是流落。楊業見他英雄、収為義子、与諸親子延平等十分相得、不異仝胞。

后亮帰宋、隨太祖出師、死于北遼陣中。其時李氏夫人生下懐腹子、楊衰父子久已懐憶。

この対北遼戦における楊懐亮に死については鼓詞『双鎖山困龍伝』にも同様の記載が見えるから、清代後期以降の高家将物語では一般的なものだったとみてよさそうである。それによれば、高懐亮は河東令公の父に骨を削って傷の手当てをしてもらい(関羽が華佗の治療を受けた情節を念頭においたもの)、その娘の李翠花を娶ったがまもなく塞北で陣没し、老令公も妻の羅氏を残して敢え無くなったとされる²⁴。

以上四者のうち、第一のものを除く、高懐亮の死をめぐる三者は、相互に矛盾ないし抵触している。案ずるに『南宋志伝』の後半で鳴りを潜めていた高氏兄弟が『北宋志伝』の第4回以降に再登場し、第15回でそろって討ち死にすることになっているのは、本来一続きであった趙匡胤物語の半ばに史実や別の物語(呼家将物語)を挿入したことと無関係ではなさそうである。いずれにせよ、高懐亮はもとより高懐徳に関わる物語も趙匡胤物語においては次要な存在だったことに間違いはあるまい。にもかかわらず、あるときそれを高家一族の物語(高家将物語)に模様替えしようとしたため、高懐徳にもうひと働きしてもらうことになったのではなかったか。

それでは趙匡胤物語にあつては主要な存在だったはずの趙匡胤の義弟鄭恩の死の経緯はどのように変遷したのか。『南宋志伝』では第45回で潞州において戦歿したとされていた。『飛龍全伝』は陳橋の兵変の第60回で終わり、鄭恩の死については語らない。一方、『飛龍全伝』の続篇といつてよい『趙太祖三下南唐被困壽州城』の第1回では、鄭恩は夙に趙匡胤に殺されてしまっていて、金鰲島の赤眉老祖がその理不尽な死に憤り、弟子の余鴻を南唐の李景のもとにやり、李景に趙匡胤を挑発させたため趙匡胤の「三下南唐」が始まるとさ

れているが、その死への具体的な言及はなかった。この点は清朝宮廷連台戯の『下南唐』も同様で、鄭恩の死の経緯にはまったく触れず、いきなり南唐の軍師于洪の不敬な書を使者の劉仁瞻がもたらし、それで「三下南唐」が始まることになっている。同じ連台戯でも『盛世鴻図』はこれらと少しく異なり、「鄭恩が太祖の韓素梅寵愛をいさめたため酔っていた太祖に殺された。素面になった太祖はそれを止めなかった苗訓を民におとす」とするが、「三下南唐」の理由についてはかえってあいまいになっている。鼓詞『双鎖山困龍伝』²⁵の状況は『盛世鴻図』のそれに大筋において一致する²⁶。

この点につき筆者は以下のように考えている。鄭恩は『盛世鴻図』で演ぜられるごとく、『南宋志伝』でも『飛龍全伝』でも度々登場する妓女上がりで後日趙匡胤の偏宮となった韓素梅、あるいはこれが生んだ八大王徳昭につき何らかの奏上をした²⁷ため太祖の機嫌を損ねて斬殺された、と、『南宋志伝』が鄭恩の潞州城での戦歿をいうのは、演義小説である『南宋志伝』は荒唐無稽な巷説（物語）をはなから採用せず、英雄趙匡胤の発跡変泰物語を構想し巷説を蒐集・編集した『飛龍全伝』もその芳しからぬ部分についてはこれを削除したのではなかったか。ちなみに趙匡胤の鄭恩殺しは、紫微星の化身たる後漢の光武帝劉秀が、その天下取りを援けんと天帝が下凡させた二十八宿の化身たる二十八将を酒に酔って殺してしまった物語²⁸を彷彿とさせる（鄭恩も黒虎星が下凡したものであった）。

ひるがえって、高懐亮の妻と子に関わる物語であるが、懐亮が妻の父の治療を受けたことは確かだが、二人のなれそめはどうだったのか。この点を論ずるにあたっては、周の世宗柴榮の北漢攻めにつき再度検討する必要がある。

楊懐亮あらため高懐亮の帰宋後、自ら出陣した楊業は低地に陣取る周軍を見て水攻めを仕掛ける

（関羽の水攻めを念頭においたもの）。柴榮を守って楊業と闘った趙匡胤は龍州壩の泥路に馬の足をとられ川に墜ちこむ（唐の太宗の淤泥河を念頭においたもの）。ところが窮地に陥った趙匡胤の頭上に八爪金龍が出現したのを見た楊業は「記得楊業不殺之恩」と言いおいて戦線から離脱してしまう（後述）。これを潮にこのたびの周の北漢攻めは中断することとなった。『南宋志伝』によれば、その後、劉承鈞に代替わりした北漢の後ろ盾となった契丹が李晏口を攻撃し、周の張蔵英がこれを撃退したとされるのだが（第35回）、どうやらこの李晏口をめぐる攻防戦のおりに高懐亮は李夫人を娶り、いくばくもなく妊娠中の妻を残して戦死したようになっていたようである。

では李夫人（と懐亮の遺腹の子）はその後どうなったのか。『趙太祖三下南唐被困壽州城』に、壽州に閉じ込められた太祖を救出すべく鄭恩の妻陶三春が総大将、趙王姑即趙美容が先鋒となって出陣する情節がある。陳搏に南唐に勝利するには五陰の出陣が欠かせないと示唆されたからであり、二人はその人選にあたったわけであるが、残る三人の一人に参軍李夫人がいた。この李夫人こそ懐亮の妻李氏であった。なぜなら、李夫人の子は高玉字君佩で、高懐徳と趙美容の子高瓊字君宝（君保、俊保）の従弟とされていたからである。この李夫人、連台戯の『下南唐』では李翠華、鼓詞の『双龍山困龍伝』では李翠花（父母は李袞と羅鳳英）、後述の『宋史奇書』では李翠屏とされた（ちなみに李翠屏は薛家将物語の『金貂記』で薛丁山を援ける女仙の名でもある）。なんにせよ、李夫人が『趙太祖三下南唐被困壽州城』が刊行された咸豊当時すでに高家将の一員となっていたことは明らかである。ところが『南宋志伝』にも『北宋志伝』にも李夫人は登場していないのである。その物語が巷間に流布していなかった可能性はもちろんある。だが、『南北両宋志伝』が演義小説

であって、懐徳、懐亮の兄弟さえあつてなく退場させられていたことを思えば、熊大木が意図してそれを取り込まなかったと考えることもまた可能なのではあるまいか。

筆者としては、高懐亮と李夫人（李翠華）をめぐる物語は嘉靖のころにはすでに存在していたが、あまりに荒唐無稽とみる熊大木の採用するところとはならなかった。だが兄弟が名乗りを挙げる場面はその鑑識にかなない採用された。このため『南宋志伝』では高氏兄弟、とりわけ高懐亮（と李翠華）をめぐる物語は尻切れ蜻蛉に終わったと考えておきたいのである。では無視されたその物語はどうなったのか。この点については引き続き下文で論ずることにしたい。

四 接木された高瓊と楊袞

——ニュー・ヒーローと新たなプロットの導入をめぐる

高家将物語における高懐亮と楊業の関係については既述の通りだが、『趙太祖三下南唐被困壽州城』の第32回に、太祖の軍師の指示を受けた高玉が石州（山西省離石県）に救援要請にゆき、そこで楊袞を目通りし「曾孫玉拜見太祖大人、并請金安」と述べているように、この時点ではすでに楊業の父は楊袞と定まっていた。それどころか、清朝宮廷連台戯の『欣見太平』や『下河東』では既述の水攻めを計画した者も楊業でなく楊袞となっていた。しかも楊袞は窮地に陥った趙匡胤を見逃しただけでなく、これと義兄弟の契りを結び、金錘と玉帯を交換したとされていた²⁹。太祖がこのたび楊袞に救援を求めたのもこの義兄弟の契りあるがゆえであった。しからば『趙太祖三下南唐被困壽州城』とふたつの連台戯（『欣見太平』と『下河東』）は、成立の時期を同じくするとまではいえざとも、同一内容の高家将物語を念頭においた作品と認めてよいのではあるまいか。ちなみに救援を

求められた楊袞は高齢を理由に子の楊業と孫の延平を壽州に向かわせることになっていた。

では、楊家将物語（や高家将物語）に楊袞が登場するのはいつのころからか。『南宋志伝』に楊業の父である楊袞は登場しない。だがこれと別の楊袞なら登場している。太祖郭威の死を知った北漢の劉崇が契丹に兵を借り周に侵入した際、契丹が前鋒として派遣した将官に政治令の楊袞がいた（第30回）。周兵の強盛を知り、劉崇が口先だけで援軍を出さないことに立腹した楊袞は、全軍を撤退させ（第31回）、帰国後契丹主に入牢を命ぜられた（第32回）。この楊袞は以後の『南宋志伝』には登場しない。案ずるにこの楊袞こそが楊業の父楊袞が登場する契機となった人物に相違ない³⁰。とはいえ、念のために、『南宋志伝』刊行当時すでに楊家将の隊列に契丹の楊袞から変わった楊業の父楊袞が加わっており、それが史実に沿わないことを嫌った熊大木により契丹の楊袞にもどされた可能性についても検討しておかねばならない。ただしそれにはあわせ検討しておかねばならないことがある。高家将の三代目、高行周の長子高懐徳（と趙美容）の子とされる高瓊がいつ高家将の隊列に加わったかがそれである。

高懐徳の子高瓊字君保（以後は引用をのぞき高瓊または君保とする）は『趙太祖三下南唐被困壽州城』、清朝宮廷連台戯の『下南唐』ならびに『盛世鴻図』（と鼓詞『双龍山困龍伝』）に登場する。以下に『趙太祖三下南唐被困壽州城』前半のあらすじを紹介しよう。

南唐李景に挑発され、自ら高懐徳らを率いて出陣した太祖趙匡胤だったが、まんまと余鴻の術中にはまり壽州城に閉じ込められてしまう。陳搏の弟子となっていた鄭恩の子鄭印の知らせでこれを知った留守の趙光義（後の太宗）は、陳搏の「欲勝南唐定世華、五陰須待数無差」なる言葉に従い、陶三春を総大将とする五女将を援軍に送る（実は

五老陰でなく五少陰でなければならなかったのだが)。若年を理由に母美容から従軍を拒まれた高瓊は抜け駆けして壽州に向かう。ところが途中の双鎖山で劉金定(五少陰の一人)の立てた招夫牌を倒したことから婚姻を迫られ、金定の師の梨(黎)山聖母(以後は黎山聖母に統一する)に宿命を諭され、金定と一夜をともしたのち壽州に向かう。金定は北漢の将だった劉乃の娘であった。劉乃は『南宋志伝』にも『飛龍全伝』にも登場しないが、『下河東』と『欣見太平』に登場する劉竊がこれと同一人であろう(『下南唐』と鼓詞『双龍山困龍伝』では劉奈、『盛世鴻図』では劉鼎方、『趙匡胤演義』では劉大奈となっているが、いずれにせよ架空の人物である)。『下河東』と『欣見太平』が北漢の將軍劉竊を登場させているのは、高家将物語のこれに続く部分に劉金定がすでに登場していた証左とも、今後登場させる契機となったとも両様にとれるが、いずれにせよ先の成立時期に関する推定の妥当性を強く示唆するものであることに間違いはない。ちなみに高瓊は劉乃がもと北漢の将であることを金定との婚姻を拒む理由のひとつに挙げていた。

高瓊は金定が授けた定魂符のお蔭で父懷徳のように余鴻の落魂鑼に心神喪失することなく、無事壽州城に入場できた。金定は高瓊の後を追って壽州に向かい、途次余鴻の飛刀で傷ついた美容を救う。だが包圍陣を打ち破って壽州城の城門まできたものの、戦闘の際に令箭を失っていたため太祖に素性を疑われ、壽州城を取り囲む南唐軍を東西南北の四門で打ち破ることを求められる。かくしてようよう入城を許された金定は病に倒れていた高瓊を黎山聖母の靈丹で癒すが、意外や高瓊は金定との婚約の事実を認めようとしない。従軍中に婚姻したことで処罰されることを懼れてであった。事情を察した太祖が金定をなだめ、ふたりはめでたく完婚する(以上第20回まで)。『趙太祖三下

南唐被困壽州城』はまだまだ続くが、あらすじの紹介はここまでとし、本題にもどろう。

この高懷徳の子高瓊であるが、既述のごとく『南宋志伝』には登場しない。しかし楊褒の場合と同様、これと別の高瓊なら登場している。周の世宗による「一下南唐」のおり、六合で南唐王李璟(景)の弟齊王李景達に「汝唐軍屢敗於我、何不早降、以免生靈之苦」と降伏を勧め、拒否された後にこれを打ち破った牙将の高瓊がそれである(第40回)。この牙将高瓊、楊褒同様この後の『南宋志伝』には登場しない(ちなみに『飛龍全伝』はこれに対応する部分を欠き、清朝宮廷連台戯にはこの場面を演ずる齣が残っていない)。ただし牙将以外の高瓊なら『南宋志伝』にも『北宋志伝』にも登場している。『南宋志伝』第42回の渙水の戦には歩将高瓊が登場する。奇妙なことに、この高瓊、次に登場する際には張瓊と姓がかわっている。さらに『北宋志伝』第5回には太宗の命により太行山に呼延賛を召しにゆく高瓊が登場する。牙将の高瓊を含め、『南北両宋志伝』に登場する三人の高瓊はいずれも高懷徳の子とはされず、同一人か否かも明らかでない。

では『南北両宋志伝』に登場する三人の高瓊に対応する実在の高瓊は存在したのか。『宋史』巻289・列伝48に伝が立てられている高瓊がおそらくその人であろう。この高瓊、燕人で祖を覇、父を乾といった(字は言及されない)。「五代時」に南唐の李景が契丹とひそかに連絡をとり使者を行き来させており、覇がある時その任にあたった(孫の高瓊を燕の人とするから覇は契丹の領域に居住し、その配下となっていたと思しい)。李景は契丹と「中夏」を対立させるため、途中の濠州(安徽省鳳陽県)で覇を殺し、汴人が殺したと言いつたという。このおり覇に同行していた乾はそのまま濠州に居つき、三子を生み宋に仕えたという。高瓊はそのうちのひとりで、京兆尹時代の

太宗に仕え、太宗即位後は馬歩軍都軍頭、歩軍都指揮使などとなり、真宗にも仕えたという。『南北両宋志伝』に登場する、李璟の弟李景達に降伏を勧める高瓊は、実際に祖の覇を李景の刺客に殺されたこの高瓊であるに相応しい。さらに、実在の高瓊は太宗に従い太原にも遠征しているから、太行山に呼延贊を召しにいったとしても不可はない。しからば『南北両宋志伝』に見える三人の高瓊は同一人であり、実在のこの高瓊、少なくともそれをモデルとしたものとみてよいのではないか。

先に、実在の高瓊が楊家将物語に楊業の父楊衰が登場する契機となった人物に相違ないが、念のため『南宋志伝』刊行当時すでに楊家将の隊列に楊業の父楊衰が加わっていた可能性についても検討しておかなければならず、その際あわせて高家将三代目の高瓊が高家将の隊列に加わった時期と契機についても検討しなければならないと述べた。このあたりで筆者のこのふたつの問題に対する答を提出しておきたい。

楊業の父楊衰が『南北両宋志伝』成立以前に楊家将物語に登場していた可能性は低いものの皆無ではなかろう。だが高懷徳の子高瓊が同じころ高家将物語に登場していた可能性はほぼ皆無であろう。もちろん物語が成立した時期は楊家将物語が格段に古く³¹、高家将物語は遅れてそれをモデルに生み出されたと思しいから、状況が異なる場合もあろう。だが父の高懷徳の影も見えない（敵軍に囚われても閉じ込められてもいない）のに子の高瓊が活躍することはありえまい。加えて楊衰にせよ高瓊にせよ、宋の太祖・太宗の在位期に同姓同名の、楊家将とも高家将とも無関係な人物が存在しており、両者がそれぞれ楊家将物語の高瓊や高家将物語の高瓊に変身した可能性があるなら、あえて両者の登場の経緯を区別して考えるには及ばまい。『南北両宋志伝』（と『楊家府世代忠勇通俗演義志伝』）の時点の楊家将物語の隊伍は楊業

とその子孫に留まり、楊業の父楊衰はいまだ登場していなかったはずである（宗保については別に考える必要があり、ここでは論じない）。楊家将物語をモデルとする高家将物語の成長が楊家将物語の成長に遅れることは言を待たないから、高懷徳の子の高瓊についてもいまだ登場していなかったとみてよからう。

ひるがえって先に述べた『南宋史伝』第30、31回に見える契丹の前鋒楊衰の行動であるが、『資治通鑑』巻291、292の記載をほぼそのまま踏襲したものであった。これに対する『飛龍全伝』は契丹の前鋒楊衰をあらかじめ楊襄と改めたうえで（第47回）、楊業の父楊衰を「奉了父親楊衰之命」とさりげなく登場させている（第50回）。このふたつの変更は連動したものであって、その後の高家将物語を発展させるべく巧妙にしくまれたものだったに相違ない（後述）。

高家将物語（及び趙匡胤物語）は、契丹前鋒楊衰+楊業不殺の恩の『南宋志伝』→契丹前鋒楊襄と楊業の父楊衰+楊業不殺の恩の『飛龍全伝』→楊衰が趙匡胤と義兄弟の契りを結んだとする『欣見太平』『下河東』の順に成立したと思しい。ひるがえって『飛龍全伝』や現存の『欣見太平』『下河東』であるが、これらはいずれも高瓊が登場する以前に情節を終えている。したがってこれらが依拠した高家将物語で高瓊が活躍していたかはさだかでない。ただ後に文字化されたと思しい物語ほど高瓊を字の君保（または君宝、俊保）でよぶ傾向が高いことは注目されてよい。諱の瓊を意図的に隠したのではあるまいか。

視点を替えよう。楊業の役割を楊衰に振り替えることにしたのは、単に世代をひとつ遡らせたかったためだけなのか。『南宋志伝』に続く『北宋志伝』は、冒頭の第1-3回で呼延贊が金頭娘を娶る情節が語られ、第4回では一転して北漢征伐のおり宋軍が楊業に打ち破られ撤退したことが語ら

れる。第5回はこれらをうけ、太祖が死に際に「朕觀汝龍行虎歩、他日必為太平天子。但汝姪德昭、當善遇之」と太宗に帝位を譲る意思を伝えた後、以下の三件の実現を託すことになっている。すなわち「第一件、河東近辺之地、不可不取。第二件、太行山呼延贊、當召而用之。第三件、楊家父子、朕愛之為將……可於金水河辺預造無佞宅以待之、使人通消息於山後、其來必無疑矣」（三台館本）がそれである。ところが『北宋志伝』第5回までの記述だけでは太祖が楊業にこれほど入れ込む理由がわからない。もちろんそれは太祖が楊業に不殺の恩という借りがあったからで、『北宋志伝』のための伏線が『南宋志伝』であらかじめ用意されていたわけだが、それが熊大木以前の趙匡胤物語でもその通りであったかは一考を要そう。案ずるにこの間の情節はあくまで趙匡胤が「真天子不可傷也」であることを強調せんがためのものであって、『三国志演義』第34回に、的盧を駆り檀溪を渡ろうとした劉備が危うく難を逃れた情節が挿入されたのと同様の意図によったものだったのであつたか。熊大木は楊業不殺の恩を趙匡胤物語に持ち込み、太宗趙光義が受け継いだ天下統一をスムーズに達成させるため、これと楊家将物語との融合を図つたのではなかつたか。

この場合、趙匡胤物語（及び高家将物語）の変遷を次のように想定することも可能だろう。熊大木は巷間に流布する趙匡胤物語と楊家将物語を『南宋志伝』と『北宋志伝』として再編しようと考え、両者を結び付けるべく、即位以前の太祖に楊業と義兄弟の契りを結ばせることにした。だが後世の何者かがそれでは不都合があることに気づいた。楊業があまりに長命になってしまうからである。そこで楊業の親を登場させ、これと太祖が義兄弟になるとかえた。幸い『南宋志伝』には楊袞という実在の楊姓の人物がいた。それでこれを楊業の父に仕立て上げた、と。

では高瓊についてはどのように考えるべきなのか。この点についても次のように考えてはどうか。高懷徳の子高瓊は『南宋志伝』や『北宋志伝』に登場する高瓊から誕生した。高瓊と劉金定の陣前招親の物語はともなつて新たに導入されたものであるが、まったく素地がなかつたわけではなく、それこそが高懷亮と李翠華の物語ではなかつたか、と。

そもそも家将物語は、その家系が断絶しない限り次代のヒーローにバトンを託し、その物語を紡ぎ出そうとする性格のものであつた。物語の消費者である聴者や読者はそれを求めたし、生産者である講釈師や書肆の老板（に雇われたライター）もその期待に応えるべく努めたはずだからである。次代のヒーローに主人公を譲らず、当初のヒーローを活躍させ続ける手もなくはなかつたろうが、不死の英雄でもない限り、それでは早晩行き詰まることは目に見えている。そもそも悲劇の英雄に長命は似合わない。そこで次々に次代の新ヒーローを登場させることにしたのであろう。

この次代の子孫をヒーローとして新たに登場させる手法は安易ではあるが意外と生産力があつたし、『西遊記』に続書が創られる経緯にもなんらかの影響を与えたと考えられる。とはいえ『西遊記』の続書は、たとえば『西遊補』がそうであつたように、一流とはいえずとも文人がその創作に関わつていたのである。中国小説史において初めてといつてもよい個人の創意により紡ぎ出された小説が誕生することになったが、家将物語の場合は講釈師や書肆の老板が巷間に流伝する歴史物語に人々の脳裏に普遍的に存在する物語素³²を附加して安直に作つたものであつたから、作品の水準についてはいづくもなかつた。そしてその窮極の手法が、主人公の傍系の先代に関わる物語を再利用してそのままニュー・ヒーローのそれとするというものであつた。かくして高懷亮と李翠華の物

語は高瓊と劉金定の物語として再生することになったのではなかったか。

なお劉金定が宋の太祖により四門に転戦させられ、入城後に高瓊に婚約の事実を否定される物語は、同じ家将物語の薛家将物語にも時と所と人物をかえ、同様のものが見えている。これについては別稿で論じた³³から、そちらを参照されたい。

五 五老陰と五少陰

——西王母文学の末流

高家将の三代目高瓊は既述のごとく壽州城に閉じ込められた太祖趙匡胤（と父高懷徳）を救出すべく、抜け駆けして五老陰が率いる援軍に先行したが、双鎖山で劉金定の立てた招夫牌を倒して婚姻を迫られ、何度か拒否したが、金定の師である黎山聖母が授けた通力に敵しえず、聖母に説得されたこともあり、金定と一夜をとみにしたのち壽州に向かった。

ひるがえって、太祖の「三下南唐」の留守を預かった、のちの太宗趙光義が五老陰を援軍として遣わしたのはなぜか。そもそも『趙太祖三下南唐被困壽州城』の太祖は、功臣鄭恩を枉殺し赤眉老祖の怒りをかったため「三載魔幟飛災」の定めがあり、三年の間壽州に閉じ込められることになっていた（第6回）。つまり鄭恩の枉殺こそが太祖の「三下南唐」、ひいては「被困壽州城」の因であったはずなのである。ところが『趙太祖三下南唐被困壽州城』は肝腎な太祖の鄭恩枉殺の経緯をまったく語らず、いきなり金鰲島の赤眉老祖が太祖を懲らしめるため黎山聖母、陳搏老祖、孫子（孫臏）真人の同意のもと弟子の余鴻（連台戯では于洪）を南唐李景のもとへ遣わすところから始まっていた。『趙太祖三下南唐被困壽州城』は太祖の鄭恩枉殺を意図的に隠蔽しようとしていたのである。ちなみに太祖の「三下南唐」を語る物語としてはこのほか、連台戯に『下南唐』と『盛世鴻図』、

鼓詞に『双鎖山困龍伝』があったが、既述のごとく、鄭恩は太祖の韓素梅寵愛を諫めたために殺され（『盛世鴻図』）、そうなるにあらかじめ知りながらとめなかった軍師の苗光義（苗訓）が太祖に庶民におとされることになっており（『双鎖山困龍伝』）、鄭恩は元壇神が下凡したものとされていた（『盛世鴻図』）。

鄭恩枉殺から話題を「被困壽州城」に移そう。大軍が孤城に閉じ込められればすぐにも糧食の問題が出来る。だがそこはよくしたもので、物語においては必ず天佑があることになっている。玉帝が「飛鼠運去当日唐李密之粮三十万以济軍」を命ずるからである。この、飛鼠が李密の皇（黄）糧を運び去った経緯は物語小説の『大唐秦王詞話』の第9回に見えるが、そこではその行方、三十万（石）の数字とも言及されることはなかった。ところが同じく物語小説でも後出の『説唐全伝』の第43回になると、尉遲恭が「下荊州」の際に閉じ込められた樊城、秦叔宝が掃北の際に包囲された牧羊城、太宗が征東の際に閉じ込められた三江越虎城にそれぞれ三万石ずつ、楊六郎が閉じ込められた幽州に七郎が「一箭射下月光」して得る六万石、都合併せて十五万石が予め運び込まれていたとされた（牧羊城は木陽城と同じものであろう）³⁴。『趙太祖三下南唐被困壽州城』第6回ではそれが九十余万となり、宋太祖の壽州城、唐太宗の三江越虎城、後日楊文広が閉じ込められる粤西柳城³⁵にそれぞれ三十万ずつと変わっている。英雄物語（家将物語）における英雄の被困と天佑（飛鼠により予め隠匿された糧食の発見）も物語素のひとつであって、対象となる英雄の名（と時と所）を替えつつ、厭くことなく繰り返される底のものだったのである。

ひるがえって鄭恩が殺される必要性であるが、実はもうひとつあった。鄭恩と陶三春の子で、幼時に陳搏に攫われその手元で修業をさせられてい

た鄭印が母のもとに戻り、留守の趙光義に「如要収逐此道人(余鴻)、除非五陰將全、敍会大合、共結良縁、方能平定得南唐」なる言葉を伝える必要があったからである。これを聞いた趙光義は陶三春を総大将とし、趙王姑を先鋒、李夫人を参軍、羅夫人を左軍、余夫人を右軍とする援軍を壽州城に向かわせた。上界地魔星が臨凡したとされる、金霞聖母の弟子で母大虫の渾名をもつ陶三春の武勇については『飛龍全伝』の第40回などに、趙王姑すなわち趙美容のそれは即位以前の太祖が帰徳城に閉じ込められ病に倒れたおりかわって南唐軍と闘ったとする『欣見太平』の第8本などに見える。李夫人も既述の通りなら武勇をそなえていたはずだから、「五陰」としては順当な人選であったが、「敍会大合、共結良縁」とは明らかに齟齬していた。ちなみに羅夫人は李翠華の母、余夫人は余夫人の誤りで余賽花のことであったかもしれない(鼓詞『双鎖山困龍伝』には楊業の妻余賽花が登場している)。

ところで『飛龍全伝』ならびに『趙太祖三下南唐被困壽州城』には陳搏の姿が各処に見え隠れしていた。陳搏は宋初に実在した高名な道士だが、『飛龍全伝』にあつては、第17、18回で趙匡胤との賭け碁に勝って華山を譲り受けたのみならず、弟子の苗訓字光義を通じ、趙匡胤にさまざまな示唆を与えるなど陰に陽にこれを護っていた。既述の、趙匡胤が大名府に配流される原因となった城隍廟での泥馬試乗を回避させようとしたのも、董達との銷金橋での争いで陥った窮地を救うべく鄭恩を差し向けたのもその弟子の苗光義であった³⁶。苗光義は鄭恩枉殺の経緯を語らない『趙太祖三下南唐被困壽州城』と『下南唐』では太祖の「三下南唐」に従軍し引き続き重要な役割を果たしているが、同じく太祖の「三下南唐」を扱う連台戯であっても、鄭恩枉殺と苗光義追放に言及する『盛世鴻図』ではその扱いに苦慮したとみえ、庶民に

おとされた機会を利用し諸国を廻った苗訓(字光藝)が聚賢山で黄石公の弟子馮茂を説得して太祖の救援に向かわせ(「同門相遇」と「焚寨起程」)、于洪との最終決戦の直前に自身宋軍に太祖を尋ね劉金定の危機を救う(「苗訓面聖」と「虔心請聖」)ことにした³⁷。どうやら苗光義は『飛龍全伝』はもとより、『趙太祖三下南唐被困壽州城』でも、李世民物語の徐茂公のごとく欠かせぬ人物であったようだ。

しからば『飛龍全伝』では陳搏と苗訓、『趙太祖三下南唐被困壽州城』では陳搏(及び苗訓、黄石公を始めとする神仙ならびに女仙)とこれに対立する赤眉老祖が影の主役であつて、後者の構想は、赤眉老祖の、南唐を指嗾し、あらかじめ決められていた太祖による鄭恩枉殺に処罰を与えようとする言分にやむなく同意はしたが、下凡神(鄭恩)の時宜を失せぬ帰天にはこの方法しかないことを知る陳搏が、弟子すじの男将と女将に良縁という共同戦線を結ばせ、赤眉老祖側の妖仙と戦わせ、その意図を阻むというものだったに相違ない。このようにみても、『趙太祖三下南唐被困壽州城』は闡教の老子と元始天尊が周、截教の通天教主が殷の応援団となり、弟子の仙人らを闘わせる『封神演義』のミニ版であつて、苗訓は子牙ということになりそうである。だが大きく違っている点があつた。最後に戦没者の封神がない点がそれである。さすがに五代宋初の時期ともなると封神云々をいうのは無理だったのであろうが、そもそも『封神演義』は戦没者の慰霊(封神)に収斂する物語であつたが、『趙太祖三下南唐被困壽州城』は若年の男女の結婚に収斂する物語だったからでもあつた。小説も戯曲と同様本来孤魂を超度するためのものであつたが、そうした時代はずで過去になってしまっていたのである。

ともあれ『趙太祖三下南唐被困壽州城』は夙にその第7回で、鄭印が趙光義に陳搏の先の言葉と

七言律詩「欲勝南唐定世華 五陰須待数无差 也知榴樹藏金錠 那曉銀屏艾蕪芽 救駕生香芳号郁 降魔解語女為花 簫音引鳳誠奇遇 風虎雲龍總一家」とを伝えた時点で、宋軍の男将五人が南唐側を含む女将五人と良縁を結び、それにより宋（趙匡胤）による南唐平定の事業が完遂されるとする構想が示されていたのである。

ちなみに劉金定の相手の男将が高瓊であることは既述したが、残る四人の男将は黃石公の弟子馮茂、高瓊の従弟で高懷亮の子の高玉君佩、鄭恩の子鄭印、それに楊業の長子楊延平であった。彼らはそれぞれ陳搏の代理人である軍師苗光義が課した使命を果たそうとする過程で宿縁のある女将に出逢い、その協力を得て使命を果たし、女将ともども宋軍に帰陣することになっていた（ちなみに馮茂は物語小説でお馴染みの、五遁を駆使する矮人であった）。

ひるがえって五女将（五少陰）であるが、先の詩の第三句から第七句にあらかじめその名が示されていた。すなわち、劉金定、艾銀屏、郁生香、花解語、蕭引鳳がそれであり、その師はすべて女仙（黎山聖母、金光聖母、金花聖母と素珠聖母）であった。このうち黎山聖母は『盛世鴻図』では崑崙聖母となっている。しからば五少陰とその師の聖母との関係は、かつて筆者が論じた西王母とその娘たちの関係³⁸に等しいということになる。

ちなみに赤眉老祖の弟子は通天教主の場合と同様、すべて人間以外の動物だとされている。南唐の軍師となる余鴻は鴻が修行の結果人の姿を得たものとされた。余鴻は清朝宮廷連台戯の『下南唐』『盛世鴻図』などでは于洪となっている。于洪は絶魚山の竹林で焼き殺されることになっているから、『西遊記』の通天河の主の靈感大王、観音菩薩の蓮花池の金魚を念頭においたものであって、通天教主から通天河への連想ならびに余、于、魚が同音であることとにより変化したものと

推される。

最後に劉金定の師の黎山聖母が楊瓊と劉金定に、二人の未来を「你汝夫妻享受不尽人間富貴、一生福祉齊眉。但後嗣艱辛些、也不失為二美伝家。不須多疑少慮、此定数之言、是汝夫妻一生結果的主去」と予言している点は、高家の後代に言及しているという点で注目される。これによれば、二人の間に男子は生まれず、女子が二人生まれることになっていたようだが、後続の物語では必ずしもそのようになっていないからである。この点については次節で述べたい。

六 高家将四代目の高廷賛

——主役の資格

高懷徳は太祖趙匡胤の妹趙美容（玉容）を娶り、高瓊字君宝を儲けた。君宝は君保とも俊保とも表記されるが、それは高瓊を主人公とする物語が口頭で語られ成長したことの証しといえよう。高瓊は生涯に三人の妻を娶った。最初が劉廩の娘の金定、二度目が太後の長皇孫女の玉潔公主、最後が桂陽侯曹翰の娘月娥である。

『宋史奇書』によれば、劉金定は太宗在位のみぎり、夫の高瓊と南唐を平定した後の閑居無事の際、古今の書史を閲して人生の無常を悟り帰山したとされる（棄舎紅塵、帰山而去）。かつて修行した黎花山の黎山聖母のもとへ戻ったのであろう。青春まっさかりで妻に去られ鬱病になった子を案じ、美容は母太后に経緯を奏上した。太后はさっそく太宗の長皇孫女、玉潔公主を下嫁させた。ところが成親二月と経たぬうちに江南で馬元佑の乱がおこり、高瓊が平定に向かうが、この間に玉潔公主が病没し、高瓊も敵に包囲されてしまう。高瓊の母美容が出陣して高瓊を救出するが、玉潔公主が亡くなったことは言い出せないでいた。そんな折、丹陽の守将曹翰が賊の鉄弾子張威に殺される事件がおこった。曹翰の娘月娥とともに張威を

討った美容は、月娥の容貌が劉金定と瓜二つであり、武芸・智略ともにすぐれているのを知り、高瓊に囚った後、次室にすべく納彩の儀を執り行った（陣中ゆえ婚礼には及ばなかった）。ところが帰京の途次、太宗から突然「不与公主成服、臨陣収妻、背公私娶」と譴責され、そのまま西涼波羅国の征伐に向え、事が収まった後、功で罪を贖い婚姻を認めるとの宣旨が降る。かねて息子呂英の件で高瓊に遺恨を抱いていた礼部尚書呂惠卿が弾劾したためであった。美容は急ぎ入京し陳弁これつとめるが如何ともしようがなく、高瓊と月娥は波羅に向かうことになった。

かくして十二年、夫妻はこの間に生まれた一子高廷賛とともに波羅国と戦い、ようやく降表を献上させた時にはすでに真宗の時代となっていた。真宗は高瓊に帰国を命ずるが、折悪く塞北の番王耶律泰が雁門関を侵犯したとの知らせが入り、首相となっていた呂惠卿のたくらみで、高瓊はそのまま北伐に向うよう命ぜられる。

潼関でこの知らせを聞き、あわせて母美容が一月前に亡くなっていたことを知った高瓊は慟哭し、意識が遠く間に出世離塵を勧める劉金定を見たかと思うと目が覚めた。大悟した高瓊は妻子を棄て超凡入聖して義勇仙姑となっていた劉金定に従い紫芝山朝霞洞にゆき、礼星拝斗修真の法を授かり、後日登仙した。残された月娥は皇帝の命もだしがたく、東平侯となった十三歳の子廷賛を連れ、兵を率いて北上し、五年の歳月をへて番王に降表を献上させた。この度は呂惠卿父子が死んでいたこともあり、無事帰京できた。

神宗皇帝により東平侯から鎮国公にのぼされた廷賛は、さっそく暇を請い、祖母美容の靈柩を祖父懷徳が曾祖父行周の出身地である漁陽東門外小燕山下に設けた莊院麒麟村に葬った（行周が実在の高瓊と同じ燕人とされる点は注目してよい）。この時廷賛はすでに十八歳であったから、母月娥

の鑑識に適った、天波樓無佞府順天侯楊石翰の妹で平西大將軍楊懷玉の娘、楊文広の孫女にあたる、隆夫人の生んだ端娘を嫁に迎えることになった。その後曹夫人も亡くなり、廷賛は靈柩を葬るべくふたたび麒麟村に向け旅立つ。『宋史奇書』はここから始まるのだが（鎮国公三代履歴、十粒金丹的起首發源、往下方是正伝）、以降のあらすじの紹介は後のこととして、先立って『宋史奇書』での余太君ともいえる隆夫人の紹介をしておきたい。

隆夫人は西涼国鱗石山王隆海の女で百勝公主とあった。旨を奉じて征西した楊文広であったが、回国軍師海大真人の敷く五鬼凶魔陣に閉じ込められ、救援の要請に懷玉が帥となって出征することになった。この途次、懷玉は四人の夫人を娶る。王家の鸞鳳二英、李明霞、隆淑貞がそれである。このうち王、李三夫人は討ち死にしたが、隆淑貞のみ異人から伝授された青鬃馬に跨り五勾神飛鎗を縦横に振るって五鬼凶魔陣を打ち破り、十年の歳月をへて回国の降表を携え、懷玉、夙に亡くなっていた文広の靈柩とともに凱旋した³⁹。時の天子真宗は大いに喜び、懷玉を順天侯とし、隆氏を保国夫人としたのみならず、隆氏には太祖が余太君に賜った龍頭拐杖を賜り「上殿奏事、参効奸佞」を許した。その晩生の子が端娘で、このとき隆太君は華甲であったという。隆太君は外孫の高夢鸞が十六歳のおり、八旬過ぎで亡くなり帰天する。魔女星君が下凡したものであった。

都に戻った廷賛だったが、高麗王が造反したためまたもやその鎮定を命ぜられ、五年の歳月をへて二十八のおり都に戻った⁴⁰。たまたま兄の楊石翰に双子の男の子明玉・明珍が生まれたことから、端娘が廷賛に妾をもつよう勧める。かくて端娘の鑑識に適ったのが黎徳謙と陳氏の女素娘であった。だが端娘、素娘ともなかなか子室に恵まれない。それにはわけがあった。高家の先祖の諸将があまた人を殺したからというのである。三人の願いを

聴き玉京に赴いた呂洞賓が見た玉帝の善惡簿には、高行周は残唐の将として 23 年、将を 28 員、兵を 436 名（以下 28+436 人のように表記する）、高懷徳は宋将として 46 年で 57+4834 人、趙美容は 9+210 人、高懷亮は 8 年で 18+1513 人、高瓊は 12 年のうち、南唐で 15+6785 人、征北で 8+3985 人、江南で 30+2009 人、征西で 25+1823 人、劉金定は 26+23007 人、曹月娥は 11+5130 人、廷賛は征西で 25+3500 人、征北で 17+600 人、征東で 40+25864 人、あわせて高家の 8 将（李翠屏と高玉は言及されない）で 80005 人を殺めたと記されていた（第 6 回）。この数字のうち、殺めた将兵の数は適当に相違ないが、それぞれの仕えた年数及び遠征先は当時巷間に流布していた高家将物語の実体を反映するものであったろう。『北宋志伝』成立当時にあっても、懷徳と懷亮の兄弟がほぼ同時に戦没したになっていない物語が存在した可能性はなしとしまい。

言帰正伝、善惡簿にはさらに以下のコメントが付いていた。

高興周殺傷太重。因其為人忠正、取長補短。次子懷亮性暴喜殺、同子高玉俱罰夭折、以警世上好殺者之心。高懷徳夫妻雖獲殺傷之罪、忠心耿耿、孝意綿綿、為國亡身、其情可憫、後人仍賜榮華、故有子高瓊。劉、曹二氏、玉潔公主俱宥有子、因劉氏自悟歸山、将他本身殺傷罪孽、折去一角。又因高瓊、曹氏忠正賢良、又遇天寿星有罪宥諱、就罰他生在高門為子、一十六歲就該夭亡、故生於万馬營中、受尽了千驚万險、誰知他一点靈光不昧、自有知以来、就忠孝立心、仁慈臨下、因此上天又格外增了福寿、這幾年的榮華富貴、全是自己陰功德行兌換來的、有子無子、尚未定案。

このままでは引き下がれない呂洞賓は、奇貨居くべしとばかり、高廷賛が陝西の良民 78612 人を救ったことをもちだし、玉帝から「他那表中云、

願將福祿求子。如今賜他一子一女、報他忠孝仁義之行、折了他的福祿抵那一千三百九十三個人命、使他受尽些磨難、如若不改善心、賜他福祿壽終身便了」との言葉を引き出した。玉帝が廷賛の二夫人、端娘と素娘の「生簿」を調べさせると、端娘はもと瓊宮司花天女(院主)で間もなく謫期が満ち帰天することになっており、素娘は瑤池侍香仙子で「一場磨難」の後に善果を得ることとなっていることがわかった。そこで端娘にはたまたま下凡させられることになっていた金童を一女高夢鸞として、素娘には同じく東斗黒虎星を一子高双印として授けることにした。

主人公をお星さまや金童玉女が下凡した者とするのは物語の常套で珍しいことではないが、『宋史奇書』の場合、女の夢鸞が金童、その許嫁で父廷賛の親友寇侶字儔仙の一子寇潜が玉女の下凡したものとされているところが奇抜なところで、以後男勝りの夢鸞と女っぽい寇潜をめぐり、いささかユーモラスに物語が展開されることになっていた。

ひるがえって『宋史奇書』以前に大流行した、女将による陣前招親を語る家将物語では、女将が手もなく男将を捻り、臨陣収妻で罰せられるのを懼れ尻込みする男将に婚姻を逼るというのがパターンであったが、『趙太祖三下南唐被囚壽州城』では、同じく押し売りではあるが、女将の劉金定がわざと高瓊に負け、勝ったのだから招夫牌に大書してあるように自分を娶れと逼るとなっており、先の常套からはひとひねりが加えられていた。同様、従来、勇将の子女が幼少時に仙人ないしは女仙に攫われ、仙山でその監督下で武芸または仙術（ないしはその双方）を修行し、あらかじめ定められた時期に宝貝を与えられて下山し父の家郷にもどるというパターンから、『宋史奇書』では廷賛と二人の妻（楊端娘と黎素娘）ならびにその生んだ夢鸞と双印（東斗黒虎）を天界の星官や金

童玉女が下凡投胎したものとするように変わった。ただ、こうした設定の変化が高家将物語特有のものなのか、それとも時代の変化を反映した家将物語全般にわたる特徴なのかはわからない。

『宋史奇書』はそれまでの高家将物語を含む家将物語と異なり、戦闘場面を語ることがほとんどなかった。それかあらぬか、敵方に妖術を使う妖人が登場することも、奇怪な陣立てで挑まれることもなかった（ちなみに『宋史奇書』で紹介される廷賛の塞北耶律通との闘いでは、相変わらず妖人の妖術と奇怪な陣立ての趣向が使われていたと思しい）。主人公を下凡神と設定してはいても、それは定められた寿命や子宝の有無、ヒロインの男勝りな性格を読者（聴者）に納得させるための前提として使われるに過ぎず、物語全体としては官廷と家庭それぞれの、とりわけ後者の内部における人間関係による鞘当、陰謀、暗闘を語るものと変わっている。これこそ作者が閩秀と推定されるひとつの、しかし大きな理由であったろう。それゆえ高廷賛は呂国材に陥れられ流罪となって以降、その道中でたびたび刺客に命を狙われることになってはいるが、主役の座はすでに父の冤罪を晴らすべく後を追う女の高夢鸞に移ってしまっているのである。否、高廷賛ははなから影の薄い、主役とは言い難い存在であった。そもそも女将に陣前招親されぬ男将は家将物語で主役を張ることはできなかつたのかもしれない。

七 高夢鸞と何玉鳳

——才子佳人小説の影響

高夢鸞は高廷賛と楊端娘の間に生まれた女で、端娘の分娩のおり、後堂に青鸞が飛び入るのを廷賛が夢に見たとて夢鸞と名づけられ、同日に生まれた廷賛の親友寇侶の子寇潜と許嫁の間柄となった。三歳のおりに素娘に弟が生まれるが、拳を握ったままで開かない。玉帝に高家に子宝をと掛け

合った呂洞賓が道人に化けてやってきて、「東斗東斗、速速開手、先鋒宝印、豈非你有」とよび掛けると、あら不思議拳が開く。道人はその掌に青城玉印を擦し（これにより双印と名付けられる）、予言の六句の偈を残し、家人の鄭安寧に十粒の金丹を授けて何処ともなく立ち去る。『宋史奇書』にあつては呂洞賓が舞台回しの役割を果たしており、その予言（の偈や詩）通りに物語が進行し、金丹が高家の縁者の窮地を救い文字通り起死回生させる役割を果たしている（別名を『十粒金丹』とする所以である）。

跡継ぎが生まれ順風満帆にみえた高家だったが、端娘が間もなく亡くなったことがきっかけとなり一家離散が始まる。意気消沈した廷賛が麒麟村の故家に帰ることに決めたため、夢鸞は祖母の隆夫人に育てられ、武芸を仕込まれることになった。廷賛は勧められるままに、気が進まないながら後妻を娶ったが、間もなく雁門関に派遣される。ところが呂惠卿の孫で侍郎の呂国材が子の婚姻を断られた腹いせに廷賛に無実の罪をきせ、結句廷賛は嶺南へ流罪となった。隆夫人が亡くなり実家に戻っていた夢鸞は、後妻にその連子との婚儀を迫られたため、侍女と二人、男装して家をとびだし父の後を追う。このすきに後妻（とその実家）の悪巧みにより双印が攫われ、責任を問われいたたまれなくなった素娘は家を出て河に身を投げる。

『宋史奇書』はまだまだ続くのだが、以下では途中を端折ってその結末を一言でいえば、悪は滅び正義は勝つといったところで、寇潜を名乗り御前試合を勝ち抜き、女と気づかれることなく將軍となり掃北に出征した夢鸞が、たまたま女装し高夢鸞として金に抑留され、公主として宋軍陣営に送りこまれてきた寇潜とめぐりあい、戦いに勝利して凱旋し、父廷賛の無実と呂国材の通敵の事実を暴く。結句呂国材は獄死し、自身はかつて危地にあつた寇潜を救った郁蓮英、自身寇潜を名乗っ

ていた時になりゆきで婿となるはずだった呂国材の娘呂氏とともに寇潜に嫁ぐ。素娘と再会した廷贇は鎮国王に復し、姉とともに従軍して功績を挙げていた双印は還郷侯となり、寇潜も翰林及第加太子侍読となった。だが最も羨むべきはやはり寇潜であろう。『水滸伝』の宋江のごとく何もせず逃げ回っていただけなのに、双嬌斉獲どころか三嬌斉獲できたからである。しからば寇潜は『兒女英雄伝』の安驥公子、高夢鸞は十三妹の何玉鳳にあたろう。文康の『兒女英雄伝』は光緒 4(1878)年の北京聚珍堂活字本が原刊本とみなせる。『宋史奇書』には光緒 14(1888)の漱蘭居士の序が冠されていたから、それが『兒女英雄伝』の影響下に創作されたものであることはまず間違いなさそうである。

小 結

太祖趙匡胤を主人公とする英雄物語は、趙匡胤が全国統一の道半ばで死んだため、李世民や劉秀のそれとは異なり、完結した英雄物語とはなりえぬ底のものであった。それゆえ全国統一が弟の趙光義に委ねられたごとく、英雄物語の完結も次代に持ち越されることになった。だが太宗には太祖ほどのカリスマ性はなかったから、趙光義物語として英雄物語を完成させることは望むべくもなかった。そこで腕っ節の強い助っ人が導入されることになった。楊業とその息子たちがそれである。だが物語はいきものであったから、語り手の当初の思惑通りに事が運ぶとは限らなかった。楊家の諸将が想定以上の働きを物語のなかで果たすようになってしまい、太宗の影がますます薄くなってしまったのである⁴¹。かくして楊家将物語が誕生することになった。

そもそも新王朝を興すような英雄は何百年に一度しか誕生しないが、それを陰に陽に支えながら終わりを全うできなかった武将ならいくらでもい

た。そうした武将を主人公とすれば、孤魂を超度するという小説、否物語の本来の趣旨にもかかなう。物語を継続させたければその子や孫を次々に登場させればよい。めったに誕生しない英雄も必要ない。かくて宋の太宗趙光義にかわり楊家の諸将が活躍する楊家将物語が誕生したのである。楊家将物語が誕生し好評を博するようになってみると、太祖趙匡胤の時代にもそうした武将が欲しくなるのは人情である。案ずるに趙匡胤物語には劉秀の二十八宿や李世民的二十八反王⁴²に相当する構想がもともとあり、黒虎星の鄭恩や左輔星の趙普がそのメンバーで、それが禪州に集結することになっていた(龍虎禪州大結義)が、なぜかそれが中途半端に終わり、鄭恩が趙匡胤に殺される経緯まで趙匡胤物語から抹消されるに及び、そこに高家将物語が導入されることとなったのではなかったか(いずれが因であり果であったかは今明らかにしがたいが)。だが太祖は太宗に比し英雄としての光が強かったから、その光芒に邪魔され、高家の諸将は楊家の諸将のごとき悲劇的な死を遂げることができず、ためにその物語は広汎な読者(や聴者)の心を掴むことはなかったし、そもそも家将物語と認知されることもなかったようだ。

英雄物語にせよ家将物語にせよ、主人公たる英雄や武将が窮地に陥ってはじめて物語が動き出す底のものであった。ゆえに主人公は必ず自ら敵地におもむく必要があった。かくて唐の太宗は「跨海征東」し、宋の太祖は「三下南唐」することになった。いうまでもなくいずれも架空の親征であった。二人はそれぞれ三江越虎城ならびに壽州城に閉じ込められて窮地に陥る(被困)が、片や白袍将の秦懷玉、片や女将の劉金定の四門殺転の大活躍により救われる。史実でない親征に続き史実でない遠征が物語で語られるようになるのは自然な流れであって、唐の太宗は征東に引き続き征西をすることになった。一方、多少とも歴史物語を

現実に近づけようとする動きもあったから、薛仁貴とともに征西した太宗も、鎖陽城に閉じ込められ役割を果たすや、そそくさと都にもどり、爾後の征西は薛仁貴（や薛丁山）に委ねられることになったし、楊文広の場合ははなから皇帝は同行しないようになった。高家将物語の場合も、皇帝は同行するのは高懐徳（と高瓊）に留まり、高廷賛は辺境の地で長期に亘る辛酸を嘗めるが、そこに皇帝の影は毫もなかった。

英雄物語の要素が家将物語からは完全に失われると同時に、悲劇的に死んだ武将を弔うという歴史小説、否歴史物語本来の要素も消失することになった。奸佞な宰相を武将の敵対者に仕立てることはいつでも可能だったが、主人公がそのたくらみにより敵との戦闘で死なない以上、家将物語もその存在意義を失ってしまったのである。そうなった家将物語に残された道は、以前から女将を登場させ比武招親の要素を強めていたこともあり、『児女英雄伝』によって開拓された才子佳人小説の変種に接近する道しか残っていなかったのかも知れない。それこそが『宋史奇書』であった。現在筆者は家将物語の生成と発展につき以上のように考えている。

1 全伝こそ銘打っていないが、本論でとりあげる好古主人撰の『趙太祖三下南唐被困壽州城』は、宋の太祖趙匡胤を主人公とする英雄物語と、これに仕える高懐徳・高瓊の父子などが活躍する、家将物語の性格をあわせ持った物語小説である。
2 『趙太祖三下南唐被困壽州城』の第40回に、撰者好古主人の史実と「伝奇」の関係について述べた以下に引く興味深い一節がある。

按史、宋師下江南之日、宋太祖命將出師、語曹彬等“勿以妄殺嗜戮”為囑、當其時、太祖只命將提兵征討江南耳。觀史、迴非太祖親臨戎馬之地、伝奇与史固有詳簡之分、異而不同。但史寔為根、伝奇為餘、有其形然後有其影。看者亦不須究史寔録而駁論之。

ここで「史」に對置して述べられる「伝奇」は筆者のいう歴史小説に近い概念である。にもかかわらず本論が「伝奇」にかえて歴史小説なる概念を持ち出したのは、ここでいう「史」にあたるものとして「史伝」を、「伝奇」にあたるものとして、流俗が談ずる「小説（演義、彈唱小説、異端小説からなる）」と婦人女子が談ずる「伝奇」の二類をあげる考え方が別々にあり、その「小説」の概念が筆者の歴史

小説のそれに相当する一方、そこでいわれる「伝奇」も歴史物語の文芸・文学における発露という点では「小説」と同等のものであって、文体が散文か韻文（あるいは享受者が「流俗」か「婦人女子」か）で区別すべきではなく、両者の中間的な存在と一体的に考察すべきであるとする筆者の立場からは、雑劇に対する伝奇や、裴鏑の『伝奇』所収の作品に代表される所謂唐代伝奇（伝奇小説ともよばれる）と紛れるおそれのある名称を使うべきではないと考えたからである。

ひるがえって、無文字文化の世界では「歴史」が口頭の語りで伝えられていたことに鑑みれば、ここでいう「史」や「史伝」も歴史語りに由来しそれが文字化されたものという点では「小説」（や「伝奇」）とかわらない。中国は夙に無文字文化の段階を脱しており、文字の統一と簡化、文字記載媒体（紙）の改良、木版印刷の普及という三度の大きな技術革新をへて歴史語りが文字により記し留められる範囲を広げる一方、それ以前に文字化されていた文献（及び爾後文字化されるであろう同様の形態による文献）については、順次経部の書類、春秋類や史部の正史類、古史類などに格上げしてきた。かくして宋の盛り場における歴史語り（講史）が文字化されたものが平話であるが、すでに史部の概念が確立していたから、それをそのまま「史」や「史伝」とみなすことはできず、史部の編年類や別史類の文献により演義化するのがせいぜいで、大雅の堂に登すことは望むべくもなかった。印刷文化の浸透は、かつてと較べ格段に広がっていた文字文化の享受者向けに彈唱小説や異端端小説を出版させるまでに至っていたのである。

ちなみに、上記で「婦人女子」が談ずるものとされている「伝奇」であるが、筆者はその概念を拡張し、これまでは文字化された作品を通じ文学史の研究対象となることが多かった元雜劇や明伝奇に加え、清代の花部に属する戯劇（の劇本）まで含めて考えたいと思っている。「小説」に演義と彈唱小説、異端小説の相違があったように、戯劇にもレーゼドラマとビューネドラマがあり、元雜劇や明伝奇は小説でいえば演義にあたるレーゼドラマ、京劇などの花部の戯劇（の劇本）は彈唱小説や異端小説にあたるビューネドラマに属すると考えているからである。両者の相違は「小説」の場合と同様、多く史実との間合いの取り方と劇本への手間のかけ方（芸術作品としての完成度）の相違に存しよう。

なお、先の三分類は開帝の事蹟を談ずる文献を三家に分けた（談開帝之事有三家）もので、『開帝事蹟徵信編』卷23・考辦3所引の「姚大原書本伝後」に見えている。原文については拙論「関羽の物語について」（『埼玉大学紀要 教養学部』第30巻所収、1995.3）に引用してあるのでそちらを参照されたい。

3 本論で論ずる『十粒金丹』は高家将の四代目と五代目を主人公とする講唱文学作品であるが、そこには、語り手が我、愚、我作書之人、聞き手が你、諸位、諸公、列公、看官などとして登場する（説書的、聴書的にも見えるが、これは話し手一般、聞き手一般の意味でもちいられている）。この『十粒金丹』につき、譚正壁・譚尋の『彈詞叙録』（上海古籍出版社、1981.7）は以下のごとく述べ、作者を清末の女性とみている。ただしその具体的な根拠は示されていない。

十二卷六十六回、六至十二言聯目、不署撰人、有光緒戊子（公元1888年）漱蘭居士序及紅閣外史序、光緒癸巳（公元1893年）上海書局排印（十二本）。又《繡像繪圖第一奇女

伝》、無序文、(餘全同上) 上海進歩書局石印(六本……此書作者為一女性……惜仍未能獲知閩秀姓名。與此書同故事之作品、除京劇清人李鍾豫所編《十粒金丹》外、有閩劇、皮影戲、皆名《十粒金丹》、皮影戲為清人霖沛所作。又有秦腔、名《暖玉佩》、係高培支所編。

4 注3で紹介した中国古典講唱文学叢書本『十粒金丹』(鄭榮・袁健校点、中州古籍出版社、1986.4)は、『彈詞叙録』に著録されるごとく彈詞と分類されているが、これとほぼ同文の『宋史奇書』と題する昇平旧蔵鈔本を収める『故宮珍本叢刊』(海南出版社、2000.6)の目録は、原題の『鈔本宋史奇書』にわざわざ鼓詞の二字を冠している。ちなみに胡士瑩の『彈詞宝卷書目』(古典文学出版社、1957.3)はその『彈詞目』に「無著者姓名一名『宋史奇書』坊刊本(凌)/清光緒癸巳(一八九三)上海書局掛印本、六冊、改題「第一奇女」。(胡)此書李家瑞謂恐係鼓詞のごとくこれを著録し、李家瑞がこれを鼓詞と疑ったことを附記している。しかく文字化した講唱文学作品の分類は難しい。

なお、『十粒金丹』のあらすじをその「内容提要」により以下に紹介しておく。

清代無名氏所撰彈詞《十粒金丹》共六十六回、四十万字。叙写了北宋神宗時、鎮國王高廷贊受奸相陷害、其女高夢鸞女扮男装迎庭征戰、与男扮女装的末婚夫巧遇、得勝回朝為父伸冤的故事。書中以呂洞賓所賜十粒金丹為綫索、穿插了許多青年男女的離合悲歡、是一部文学水平較高的講唱作品。

ついでながら『十粒金丹』の校点者「後記」によれば、中州古籍本の底本は光緒年間申報館刊印本で、錯誤については上海書局本を参照しているという。なお本論での引用は『宋史奇書』によることとし、明らかな誤脱のみ『十粒金丹』で改めることにした。

5 たとえば注3で紹介した『十粒金丹』の第25回には「要知小姐說什麼說、接連小説下卷看分明」とある。

6 張清堯『明清家將小説研究』(学生書局、2010.11)。

7 『楊家將演義』前後の歴史小説(『楊家將演義讀本』所収、勉誠出版、2015.6)。

8 上田望「清代英雄傳奇小説成立の背景—貴州安順地戲よりの展望—」(『日本中国学会報』第46集所収、1994.10)。

9 本文に引く『古本小説集成』所収北京大学所蔵紫貴堂藏板により具体例を見られたい。

10 注7の拙文を参照されたい。

11 2000年以降、清朝宮廷演劇の檔案を多数所蔵する機関や研究者の蔵書を影印して収める大規模な叢刊の刊行が続いた。その主要なものを、本論で言及する作品とあわせ、あらかじめ以下に列挙しておく。

故宮珍本叢刊 海南出版社、2000.6
(鼓詞)鈔本宋史奇書12冊昇平署(第718冊)
綏中吳氏藏抄本稿本戲曲叢刊 学苑出版社、2004.3
四段下南唐(第30冊)
傅惜華藏古典戲曲珍本叢刊 学苑出版社、2010.4
欣見太平(第136冊)
中国国家図書館藏清宮昇平署檔案集成、
中華書局、2011.5
下南唐 頭5.末段(第72冊)
欣見太平4、6、7本(第77冊)
下河東4、7段(第78冊)
哈仏燕京図書館藏齊如山小説戲曲文獻匯刊
国家図書館出版社、2011.12

俗文学叢刊、第1輯～第5輯

新文豊出版社、2001.10-2005.9

このほかすでに『故宮博物院藏清宮戲曲叢刊(上編)』が刊行されたと聞くが、筆者未見。なお、楊家將物語と趙匡胤物語について論じた以下の拙論もあわせ参照されたい。

『昭代簫韶』と楊家將物語、磯部章編著『清朝宮廷演劇文化の世界』再収、東北大学東北アジア研究センター、2012.10

『鉄旗陣』と『昭代簫韶』、埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程紀要『日本アジア研究』第10号所収、2013.3

磯部章編『清朝宮廷演劇文化の研究』所収、勉誠出版、2014.2

宋太祖趙匡胤をめぐる清朝宮廷連台戯、埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程紀要『日本アジア研究』第11号所収、2014.3

12 『趙匡胤演義』第12回、第23回による。『趙匡胤演義』(甘肅人民出版社、1985.3)は全36回からなる評書で、孫恵文の口述を劉蘭芳が整理したものという。ちなみにこの評書は高家の祖居を山東東昌府鸚鵡嶺林子鋪高家營とする。

13 『趙匡胤演義』第17回による。なお『飛龍全伝』第31回には高行周が鷄宝山で王彦章を自刎させる情節がある。

14 『五代史平話』のゆくえ—講史の運命—(『中国文学報』第56冊所収、1998.4)による。

15 『残唐五代史演義』については、橋本堯「残唐五代史演義論—英雄中心主義—」(『中国文学報』第20冊所収、1965.4)や氏岡真士「『残唐五代史演義』への道—小説と講史—」(『中国文学報』第52冊所収、1996.4)などに詳しい。

16 時代設定が南宋時代でなく五代の後唐ごろから北宋の初期であるのに『南宋志伝』を称するのは趙匡胤が南宋王に封じられたからだとする「通説」に対し、氏岡は「本来は『南北宋伝』だったものが『南宋志伝』と『北宋志伝』に分かれ、『南宋志伝』から「南宋王」の称が生まれた」とする説を「南宋王の神話」(『信州大学人文学部人文科学論集〈文化コミュニケーション学科編〉』第34号所収、2000.3)で提唱した。氏岡説の南宋王の由来に関する議論には肯えるものがあるが、それが当初『南北宋伝』と称されたゆえんが説明されていない以上、全面的に賛成することは出来ない。とはいえ現在筆者に十全な解答があるわけではない。よって本論では『南宋志伝』を単に『南北宋志伝』の南宋部分の意味で使いたい。

17 氏岡注14の論文による。

18 たとえば本論で扱う『宋史奇書』の第5回に、三絃を抱えた盲目の胡半仙を名乗る老人が主人公高廷贊に問われて答えたセリフに、次のようなものがある。

大書小伝全都、百調歌詞記得全、会一套武王伐紂封神榜、渭水河辺請大賢、会一套文王吐哺安天下、成王八歳坐金鑿、会一套幽王烽火把諸葛(侯)戲、千金一笑喪江山、会一套昭関出走投明主、伍子胥滅楚鞭屍大報冤、会一套嘗(嚐)胆臥薪越勾踐、提刀跨馬定江山、会一套鋒劍春秋前七国、孫龐鬥智兩争奪、会一套始皇興兵吞六国、趙高弒主起狼烟、会一套楚漢争鋒斬陸行、十里埋伏九里山、会一套晋陽起義興唐伝、雄師十万破重関、会一套太宗征東收薛礼、白袍三箭定江山、会一套魏吳乱漢三国志、三顧茅廬五丈原、会一套光武中興誅王莽、二十八宿降塵凡、這是大書十二套、還有那小伝の名兒訴一番(下略)。

これによれば、現存の『武王伐紂書』『樂毅図斉七国春

秋後集』『秦併六国』『前漢書続集』『三国志』と存在が確実視される『七国春秋前集』『前漢書正(前・後)集』以外にも全相平話が存在していた可能性が存在することになる。だが、いきなりそのように断ずるのはあまりに短絡であろう。物語の巷間での流布と、それを文字化した出版物の存在は区別して論ぜられなければならない。

19 清朝の宮廷連台戯『昭代簾韶』は四郎を楊貴、八郎を楊順とし、それぞれ瓊娥公主、青蓮公主の駙馬とする。この二人は『昭代簾韶』のみならず『鉄旗陣』『原鉄旗陣』にも登場する。『昭代簾韶』『鉄旗陣』『原鉄旗陣』については、前掲註11の拙論「『昭代簾韶』と楊家将物語」「『鉄旗陣』と『昭代簾韶』」を参照されたい。

20 李燾『續資治通鑑長編』巻1 太祖建隆元年春正月癸卯には「是夕、次陳橋驛、將士相与聚謀曰：主上幼弱、未能親政、今我輩出死力、為國家破賊、誰則知之、不如先立点檢為天子、然後北征、未晚也」とあるに過ぎない。

21 『欣見太平』の成立時期については注11の拙論「宋太祖趙匡胤をめぐる清朝宮廷連台戯」を参照されたい。

22 趙美容の高懐徳との婚儀及び高氏兄弟の母との同居の経緯については『趙太祖三下南唐被囚壽州城』第21回の、余鴻の落魄羅纏によりその意のままに壽州城に攻め寄せて来た懐徳に子の高瓊とともにたむかひ、正気に戻るよう口説く趙美容のセリフが参考になる。

又不思少年時落魄、孤身失路、托足無門、一身漂泊、白(?)如水面浮萍、一遇吾兄、一心結識、不以貧賤為嫌、遂將妾聯成婚眷、又迎接父母到府、全享榮華。后又因周世宗要征伐劉崇、王爺又要逞雄強出頭、貪圖掛印。豈料世宗念着日(?)伏(?)殺其父親、反要將夫君治罪正法、幸得我兄一力保免、多方調護、方得保首領歸家。及至我兄接御江山、即推心置腹、封汝為一家王位。

ちなみに引用中の吾兄、我兄は太祖趙匡胤を、汝、王爺、夫君は高懐徳を指す。また「其父親」は懐徳の父高行周に潼関で殺された柴榮の父のことで、その間の経緯は『飛龍全伝』第22回到、十二年ぶりに対面した姑母郭威夫人柴氏に柴榮が伝える「父親在外販傘營生、權為糊口。只因在潼関漏了税、被高總兵捉住、乱箭射死。言之痛心」に明らかである。

23 那高懐亮追到吊橋边、心下暗喜、不分好歹、搶上橋来。誰知人強馬壯、槍甲沈重、那橋又是枯木朽株、預先裝活、高懐亮脚脚橋心、只聽得一聲響處、連人帶馬、跌入河中。下有鉄椿、上放乱箭、可憐蓋世英雄、竟死于徐州河下。

24 李豫他著『清代木刻鼓詞小説考略』(山西出版传媒集团・三晋出版社、2010.2)の「119 双鎖山困龍伝鼓詞」による。

25 鼓詞の『双鎖山困龍伝』については李豫他編著の『中国鼓詞総目』(山西古籍出版社、2006.4)ならびに上記注24の『清代木刻鼓詞小説考略』に見えるあらすじや原文の引用を参照している。記して感謝の意を表する。

26 『盛世鴻図』などの、太祖趙匡胤を主人公とする清朝宮廷連台戯のあらすじについては、注11の拙論「宋太祖趙匡胤をめぐる清朝宮廷連台戯」を参照されたい。なお、本論でいう『盛世鴻図』は、そこで論じたごとく、『古本戯曲叢刊』第九集所収の『盛世鴻図』を『前盛世鴻図』と『盛世鴻図』に分割した後半部分をさしている。ちなみに『前盛世鴻図』は『飛龍全伝』の第36回までと重なる部分が多い。

27 『飛龍全伝』第36回到韓素梅が義子禄哥を趙匡胤に姉の子と紹介した際、自分の血脈でないことを残念がる趙匡胤に鄭恩が「管他什麼青骨血白骨血、收這兒子、只当与你庄個子孫兒。要是二嫂子庄下娃娃来、却不是他的趙棚旁麼」といったが

ために、後に韓妃の生んだ南清宮の八大王が天下を継承できなかったとの記述がある。ここから、楊家将物語でつねに楊家の諸将を護る八大王の出生と太祖の帝位が子の徳昭でなく弟の太宗に継承される経緯をめぐる知られざる物語がかつて存在していたことが窺われる。なお八大王をめぐるのはこれ以外にもあまたの物語が存在していたようだが、ここでは論じない。小松謙「武人のための文学—楊家将物語考—」(『阿頼耶順宏・伊原澤周両先生退休記念論集 アジアの歴史と文化』所収、汲古書院、1997.4。後に「『楊家府世代忠勇通俗演義』『北宋志伝』—武人のための文学—」と改題し『中国歴史小説研究』、汲古書院、2001.1の第六章)を参照されたい。

28 この点については拙論「漢の物語から唐の物語へ—『三国志平話』をめぐる—」(『神奈川大学中国語学創設十周年記念論集 中国通俗文芸への視座—新シノロジー・文学篇』所収、東方書店、1998.3)を参照されたい。

29 『欣見太平』の第4本24齣に「宸衷眞主」が、『下河東』の第7段第6齣に「金鍾換帶」がおかれる。ここに見える金鍾と玉帯を交換する情節は、唐太宗を主人公とする物語(李世民物語)の美良川峡口澗で尉遲敬徳と秦叔宝が鞭と綱で闘い、敬徳が太宗を聖君と認知する情節を念頭においたものに相違ない。

30 この楊衰は実在の人物で、伝こそ立っていないが、『宋史』巻26並びに巻40にその名が見えている。ただし『遼史』にその名は見えない。

31 『醉翁談録』甲集巻一「小説開闢」に、「小説」の演目として「朴刀」に「楊令公」、「捍棒」に「五郎為僧」が見える。また葉盛(1420-74)の『水東日記』巻21の「小説戯文」に「今書坊相伝射柳之徒偽作小説雜書」のひとつとして「楊六使文」が挙げられている。

32 拙論「薛家将物語の生成と発展—清朝宮廷演劇との関係と端緒に」(埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程紀要『日本アジア研究』第14号所収、2017.3)を参照されたい。

33 注32の拙論を参照されたい。

34 以上の点についても筆者の注32の別稿を参照されたい。

35 楊文広が粵西柳州に閉じ込められる物語は万暦34年序を冠する『楊家府世代忠勇通俗演義志伝』第44則「文広困陥柳州城」で語られている。ちなみに万暦31年重刊の『征播奏捷伝通俗演義』巻2第17・18回の注に「柳州城、宋楊文広征蛮、曾陷入此城、後得妹宜娘用計救、此載征蛮伝」、万暦21年序を冠する『賢奕編』巻3に「沈屯子偕友入市、聽打談者說楊文広困因柳州城中」とあり、王世貞の『宛委餘編』巻6にも「宗保之子文広征南陷南中」とあり、これが万暦中に語られていた「困陥柳州」の標準タイプと認められるが、「困陥」とする内容に乏しい。飛鼠への言及があったかは別として、本来の物語は「困陥」をもった詳細に語っていたはずである。

36 苗訓は『飛龍全伝』第1回到「姓苗名訓字光義」、羅貫中の雜劇『宋太祖龍虎風雲会』第1折に「姓苗名訓字光裔、大梁人氏」とあり、その子守信とともに『宋史』列伝220・方技上に伝が立っているが、そこに字の記載はない。

37 前掲註11の拙論「宋太祖趙匡胤をめぐる清朝宮廷連台戯」を参照されたい。

38 拙論「西王母の娘たち—『遇仙』から『陣前比武招親』へ—」(埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程紀要『日本アジア研究』第8号所収、2011.3)ならびに「西王母文学

の流れ』『埼玉大学紀要 教養学部』第 49 卷第 2 号所収、2014.3) を参照されたい。

³⁹ 注 35 に引いた王世貞の『宛委餘編』巻 6 などとは異なり、この当時の楊家将物語では、楊文広は征西して回国軍師毎大真人の敷く五鬼凶魔陣に閉じ込められ、援軍の懷玉に救出されはしたものの、十年に及ぶ平定作戦の終結を待たず現地で亡くなったことになっていたようである。

⁴⁰ 講釈師による以上の高家将の概況紹介は『宋史奇書』の第 1 回に見えるものであるが、同様の記述は、後日高廷賛が奸臣呂国材により謀叛の罪を着せられ入牢拷問された際、御史の蘇公に「口供」として差し出した、高家の一五一十を物語る文書にも見える。相互に参照すべきものであるから、こちらは以下に原文で挙げておく。

万死罪臣高廷賛、瀝血陳情訴口供。臣祖彦平高懷德、祖母皇姑諱美容、千征万戰平天下、扶保著、太祖開基國祚興、南征北討三十載、大小功勞記不清。河北兵伐王(汪)天壽、五光鍾下喪殘生。為臣的祖叔高懷亮、祖母名為李翠屏。臣叔高玉与臣嫡母、都与皇家立過功。夫妻父子征西夏、尽在妖人劍下傾。臣父高瓊字君宝、本是皇家御外甥。私下南唐去救駕、舍死忘生苦尽忠。臣的前母劉金定、四門大啓截窮兵。解困救駕要降表、大破妖人于道洪。得勝班師回汴国、臣的父、二十三歲把王封。太祖皇帝宴了駕、太宗即位坐龍廷。又逢塞北刀兵起、臣父母馬到即成功。回朝無事干戈靜、臣的母、聞着殘唐伝一宗。看的是、白袍征東功似海、薛剛元夜鬧花灯。張司馬、蒙臣作弊把功臣害、薛氏一門死苦情。男女老幼三百口、個個餐刀頂冒紅。空立功勞難掩罪、不及平民得善終。劉氏母、因此決心辞世界、紅塵棄舍去修行。太宗聖主憐臣父、因念從前血戰功。重統國威招駙馬、欽賜了、玉潔公主把婚成。燕爾新婚方兩月、南唐馬氏動刀兵。欽命臣父為元帥、提兵調將把南征。公主憂思身病故、夫南妻北兩未逢。臣父至彼身遭困、裏無糧草外無兵。一連數日無救心、險把殘生峪內傾。帶血連皮燒戰馬、生吞活咽把賊充。為臣的、生母曹氏提人馬、忘生捨死与賊征。整殺三天單三夜、臣的母、渾身帶箭似柴棚。直透重圍救臣父、馬元佑、被獲遭擒纔得平。得勝回京至半路、太宗爺、又命臣父把西征。欽限緊急連夜走、苦命的、母在半路生下臣。臣的母、不顧產後身薄弱、講什麼避雨与防風。念為臣、襁褓未能(曾)得安睡、入死出生万馬中。西涼(涼)征戰十二載、為臣的、九歲隨父就冲鋒。好容易、平定西涼(涼)要降表、這其間、真宗即位太宗崩。回兵剛把潼關進、北番王、發兵夜寇雁門城。旨下又命平塞北、未得回朝轉下京。為臣的、祖母年高身有病、望子思兒眼盼紅。時時想念朝朝望、夢中哽咽喚高瓊。一病著牀八個月、只為思兒陽壽終。臣的父、動念慈憐難見面、寸斷肝腸血淚紅。飲食不進形容瘦、強打精神領大兵。夜晚安營於山嶺、天明不見影和形。直到而今没下落、未卜存亡死共生。万歲皇爺欽念為臣、一家骨肉人数多、一半為国忘家不善終。那時為臣十三歲、蒙恩襲職把侯封。臣母帶臣征塞北、五年血戰始成功。彼時真宗爺宴了駕、当今万歲把基登。奏凱還朝非容易、臣十八歲方得到汴京。太平未及三二歲、高麗朝鮮(東夷)胆敢不進貢。皇爺命下發人馬、為臣帥衆去征東。六載平服回本国、那時節、体倦神疲疾病(病疾)增。因此上、乞假葬母連告病、回轉燕山故土中。只說是、国泰民安不用武、臣得個、骸骨帰全保善終。不料耶律復造反、蒙聖恩、召取為臣把塞北征。為臣的、不敢辞疾与抗詔、捨業抛家願尽忠。兵至雁門打了仗、耶律通、妖法神石猛又凶。數年中、迎敵争鋒心使碎、死過幾次又重生。妖法無敵難取勝、多虧奴才鄭安銀(寧)。苦肉計、暗擺

一座梅花陣、纔拿住番王耶律通。署理雁門十二載、臣把那、妻子家園不里胸。念為臣、十歲西京身中箭、胸前一個血窟窿。臣母抱臣駝馬上、殺退回(番)兵進大營。口中只有呼吸氣、虧得良医妙藥得重生。征北貪功悞墜盤龍洞、跌了個、皮開肉綻遍体紅。彼時不遇人搭救、殘生早也赴幽冥。征東怒赴和合會、刀山劍海似兵城。為臣的、单手提鎗擒遼主、鬧透了、高麗(東夷)雄兵幾百屬。滿身上、刀傷箭眼十七處、未曾把、高麗(東夷)國王輕放鬆。鉄背狼、偷營行刺將臣斬、偏偏的、鬼使神差刀砍空。雖說是、仗主洪福平天下、那知臣、千驚万險得成功。

ここでは高懷亮、李翠屏、高玉の一家三人が西夏征伐のおり妖人に殺されたとされている点、楊文広が城でなく峪に閉じ込められている点が注目される。後者は楊業や薛仁貴に見えるものの後継であろう。なお高瓊の二十三歳で得勝班師して王に封ぜられて以降を語る歴史物語の存在は現在確認されていない。

⁴¹ 八大王德昭が太宗にかわって楊家の諸将とともに出征する物語の存在はそれを補うべく考え出された工夫であったかもしれない。

⁴² 注 28 の拙論を参照されたい。